東方狂世録

myo―n

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いきなり幻想郷に飛ばされた少年、上井和希が特殊な能力を持って狂気に陥った東方キャラを救っていくお話です。

最初は紅魔館からスタートします。

応援等していただけると嬉しいです。

コラボ関連の話も大歓迎です。

目次

狂夜の紅月に踊る吸血鬼編
第1話 1
第2話 11
第3話 20
第4話 28
第5話 38
第6話 51
第7話 61
第8話 75
第9話 86
第10話 97
第11話 108
そうだたまには世界線を越えてみよう
第??話 世界を紡ぐ今日この頃 118

狂夜の紅月に踊る吸血鬼編

第1話

何もない、誰もいない、何も感じない。
そんな夢みたいな空間の中に俺はいる。
体も動かせない中、暫くしているとうっすらと人の影が見える。
顔は分からない。分かるのは綺麗な金髪と紫色の服ぐらいだ。
「――――――」
その人影は何か言うとこちらに何かをかざす。
それが何だと思う暇もなく俺の意識は落ちていった。
――――
朝日が眩しくて目を開ける。
しかし、俺は起き上がらずに呟いた。
「…知らない天井だ」
布団で寝ていたはずが、いつの間にかベッドに変わっている。
状況確認の為にも一度起き上がり周囲を見る。

質素なベッドとタンスと小さめのテーブル。
必要最低限の物しか置いていない。
「何処だここ…？」
右の方に窓があるからそこから外の景色を見ようとする。
しかし外は暗く何も見えなかった。
仕方ないと外の景色を見るのはやめる。
「よっこいしょっと」
ベッドから降りて立ち上がる。
服はいつもの普段着だ、特に変なところは無い。
少し歩いてタンスを開ける、何も無い。
ハンガーもかけていないな、誰かの部屋というわけでもなさそうだ。
扉の所まで歩く。
そしてドアノブに手をかけてゆっくりと回そうとする。
しかし鍵でもかけられているのか開かない。
「……」
もう一度回す、しかし開かない。
……うん、どうしよう。

どうみてもこれは閉じ込められている。
そして閉じ込められているのにどうしてこんなに冷静でいられるのか。分からない。
よし一度状況を整理しよう。
まずこの部屋は俺の部屋じゃない、着ている服も寝巻きから普段着に変わっている。
そして今は夜、周りにはベッド、タンス、小さめのテーブルだけ。
唯一の部屋の出口である扉は鍵がかかっていて開かない。
一応窓もあるが、外が暗い上に開かない。
窓を割って飛び降りるのも手だが、ここが何階かが分からないので却下する。
そこまで考えて、俺はベッドに腰をかける。
これ以上は考えても答えがでないからだ。
悔しいが、俺にできる事は無い。
誰かが来るまで待ってみるか。

３０分が自分の感覚で過ぎたと思った時、部屋の扉が開いた。
開けたのは…メイド服を着た女性。
銀髪なのがとても目立つ綺麗な人だ。
「お目覚めになりましたか」

「あ、はい。そうです、あの…ここはどこですか？」
女性は軽くお辞儀をしながら自己紹介をしていく。
「申し遅れました、私この館のメイド長を務めています十六夜《いざよい》咲夜《さくや》と申します。以後お見知りおきを」
「は、はいよろしくお願いします。えっと…館ってどういうことですか？」
「その点については移動しながら説明させていただきます。どうぞこちらへ」
十六夜さんは扉を開けて俺に出るように促す。
俺としても聞きたい事はあるから断ったりはせずに部屋の外に出る。
「おぉう、長いな…」
外に出るとそこには長い廊下が広がっている。
３００メートルはあるんじゃないかと思えるほどの長さだ。
「では行きましょう」
十六夜さんは驚いている俺に構わずに歩き出すのでそれについていく。
何処かへ移動している途中で十六夜さんに質問を投げかける。
「あのっ、十六夜さん。少し聞きたい事があるんですけど」
「はい、答えられる範囲でしたら何でもどうぞ」
そう淡白に返す十六夜さん。

クール系なのだろうか、まぁそんな事はどうでもいい。
重要なのは質問だ。
「ありがとうございます。じゃあまず…ここは何処ですか?」
「ここは紅魔館、当主のレミリア・スカーレット様が治めている屋敷でございます」
「へー…」
屋敷とか冗談でも言っているのかと突っ込みたくなるが、十六夜さんの言葉は嘘じゃないと思える程のそっけない答えだった。まるでここが屋敷なのが当たり前みたいな感じだったので取り合えずは信じてみよう。
質問は続く。
「俺は何でここにいるんですか?」
「門番の美鈴が庭で倒れている貴方を発見しまして、放って置くわけにもいかずあの部屋で寝かせていました。鍵をかけていた件については貴方が暴れた時の予防策としてですのでお気になさらず」
「そ、そうですか」
「他に知りたい事はありますか?」
「あ、あります。十六夜さんは何故メイド服を着ているんですか?」
俺がいた国は日本、日本でメイド服を着るような奴なんてコスプレイヤーぐらいしか

いない。
　しかし見たところこの人は趣味で着ているなんて感じはしない。
　俺の質問に十六夜さんは一度立ち止まり、こちらを向く。
「これが私の仕事服ですのでこの館で働いている限りはこの格好は止めないでしょう」
「そ…そうですか……」
「質問は以上で終わりですか?」
「はい、ありがとうございます」
「私は答えられる事を伝えただけです。それでは行きましょう」
　それだけ言うと十六夜さんはくるりと振り返ると歩き出す。
　そこからは特に話す事もないので無言の時間が続く。
　そして１０分ほど歩いたところで、人一倍大きな扉の前に着いた。
「こちらです、この部屋に入ってください」
「はい」
　そう返事をすると十六夜さんが扉を開ける。
　中から生臭い匂いがするが我慢して中に入る。
　そして俺が入ると同時に十六夜さんが扉を閉め始める。
「それでは私は仕事があるので…さようなら」

「ありがとうございました。また会いましょう」
「……えぇ」
少し妙なためを作って返事をする十六夜さん。
そして扉が閉まると同時に施錠音が聞こえる。
中は…薄ぼんやりと明るいが見えにくいな、しかも生臭いし。
そう思っていると部屋が徐々に明るくなっていく。
「お、着いた」
周りを見る、どうやらここはゲームとかで出てくる玉座みたいな場所だ。
部屋には真ん中に置かれている大きい椅子以外何も無い。
しかもその椅子には6、7歳くらいと思われる女の子が何か口で噛んでいる。
その服は赤色に汚れていて髪はボサボサである。
「けど何でこんな所に子供が?」
俺が呟いた声に反応したのか、女の子が何かを吐き出す。
「ほう、中々いいな。見たところ…17歳前後か、私の好みの年齢だ」
女の子とは思えないほどの口調。
それに好みって一体何の好みだ。
「背がそんなに高くないところが傷だが、中々のイケメンではないか」

「あ、ありがとうございます」
貶されたのか褒められたのかは分からないが取り合えず礼を言っておく。
すると少女は笑う。
「はははははは!!どうやら久しぶりに上玉じゃないか!!おい、人間!!名は何と言う!!」
「えっと…上井《かみい》和希《かずき》ですけど」
少女は俺の名前を聞いて嬉々とした表情で立ち上がると光り輝く物体を放ってくる。
何だこれ…と思っていたが体が何かを感じたのか本能的に光の物体を避ける。
光り輝く物体は俺の後ろにある扉にぶつかると大きな爆発を起こす。
俺は爆発の風圧に乗せられて少し吹っ飛ぶ。
「今のを避けるか!面白いぞ、人間!!」
「何だよ今の!!?」
「今日は気分がいい!貴様が朽ち果てる前に特別に私の名を教えてやろう!!私はレミリア・スカーレット、この紅魔館の当主であり吸血鬼だ!!」
駄目だ会話が噛み合わない。
話し合いで穏便に済ます…というのはどうにも無理そうだ。
しかもあの少女はどうやら十六夜さんが言っていた当主のレミリアさんらしい。
あの子が当主かどうかは後で考えるとして、問題は彼女が俺に物凄い殺気をぶつけて

いることだ。
殺気とかそういうものは無いと今まで思っていたが今後から少し考えていかなければならない。
もっとも今の状況の俺に今後があるかが謎だが。
周りをもう一度見る。
鍵は施錠され、出口は一つしかなく、目の前には今にも俺を殺さんとする狂気に満ちた少女。
……これ詰んだんじゃね？と思ったときレミリアさんが叫ぶ。
「遊び相手として１０分間私の攻撃を耐え切ったら特別に貴様を見逃してやろう!!」
その言葉が本当かどうか分からない。
だが今の状況ではその言葉を信じるしかない。
やってやる…１０分間逃げ切ってやる。
そう決意した俺はレミリアさんが出す次の攻撃を見極めようと腰を低く構えた。
「はあっ!!」
光の物体がこちらにめがけて飛んでくる。
先程より若干速いが避けられない程ではないので避ける。
こいつまさか手加減して弄んでいるのか…？

その疑問は確信に変わる。

「ほら、どうした!!!どんどん速くしてやるから死ぬなよ人間!!!」

これは鬼畜ゲーの始まりだなと俺は思った。

第2話

目の前に攻撃がきてそれを左に避ける。
左に避けたところへ放たれる攻撃はしゃがんで避ける。
そしてすぐさま立ち上がりまた走り出す。
さっきから殆どこれの繰り返しだ。
もう一時間経ったんじゃないかと思えるがどれくらい経ったのかが分からない。
「どうしたどうした!!.まだまだこれからだというのに!!!」
徐々に息が荒くなっていく。
膝が悲鳴を上げているが気合で動かす。
膝が完全に壊れるのが先か、それとも時間が経つのが先か。
もはやそんな事も考える余裕が無くなってきた。
そして徐々に激しくなる猛攻を全力で避け続けて、遂に少女が攻撃を止めた。
「ちっ…時間切れか」
「はぁ…はぁ……」
疲労の溜まりすぎでガクッと膝を落とす。

汗が大量に出て服がそれを吸う。
濡れた服が引っ付いて気持ち悪い。
逃げ切ったという達成感と喜びが湧く。
その余韻に浸っているとレミリアが不満げな顔でこちらに近寄る。
「ちっ、まさか本当に逃げ切るとは。…まあいい、約束通り見逃してやろう」
ほら行った行ったと急かされる。
ホッと安心して彼女に背中を向けて扉へと向かう。
ーーーーだがそうした瞬間に彼女に異変が起こる。
「お前…何を!?ぐ…あああアあああぁぁアア!!」
驚いて後ろを振り向く。
そこには先ほどのレミリア…と彼女に似た黒いナニカがいた。
黒いナニカはレミリアの体に一瞬にして纏わりつく。
苦しそうな叫び声は止んだが、代わりに沈黙が訪れる。
静かな空間、永遠に続くのかと思われた矢先レミリアが喋る。
「いヤ…ヤメて…ヤメてヤメてヤメてヤメてヤメてぇぇぇ!!!」
それが彼女の叫びかは分からない。
だが一つ言えることがある、それはこの状態を放置しておくとまずいことになり

そーー

そう思いかけた時、何かに吹き飛ばされる。
そして反対側の壁まで飛ばされてぶつかった。
壁にぶつかったと同時にメキという嫌な音が聞こえた。
骨を折ったのかと思い体を見るが折れていない、多分ヒビが入ったんだろう。
何処を折ったかなんて分からない、全身に痛みが走っているからだ。
ボロボロの体に鞭を打って立ち上がってレミリアの様子を見る。
よく見ると彼女はカタカタ震えている。
何か呟いているようだが聞き取れない。
やがて震えが止まるとこちらに向いて。
「お兄サん…人。人…ヒトぁ……」
呻くようにして言葉を発しながらこちらに近寄ってくる。
扉は彼女の後ろ、そこにしか出口は無い。
おまけに体はボロボロ、とてもじゃないが扉に向かって走ることなんてできない。
「はぁ…はぁ……くそっ」
頭の中を絶望の二文字がよぎる。
なんせ彼女が出した風で俺の体がボロボロになったんだ、仕方が無いだろう。

しかも彼女は今正気じゃない、彼女にまとわりついている黒いものが恐らく正気を失わせている。
「おにイさン、ひと?·ヒトは…コロさなイと…殺すころすコロスコロス――――!!」
突如レミリアが走る。
彼女の両手には赤い…いや赤黒い槍みたいな物が握られていた。
あんなもの何処から?などと思う暇も無く赤黒い槍が投げられる。
赤黒い槍は俺の横を通り抜けて壁にぶつかる。
すると、今まで傷一つ付かなかった部屋の壁に大きな凹みができた。
「まじか…!!?」
彼女はわざと外したのかそれとも狙いが定まらないのか。そんなことはどうでもいい。
今俺がするべきことはあの槍に当たらないようにする事だ。
槍が再度放たれる。
今度は肉眼で追う事ができないスピードだ。
「なっ――――!」
「死ンじゃえ」
肉眼で槍を見ることができずに気が付いたら槍は目と鼻の先にあった。

流石にこれは避けられない、そう思い目を瞑る。
しかし…何も感じない。
恐る恐る目を開けると、目の前には何も無かった。
「ナんで？なんでなんでナんでナンデナンデ!!」
何でかなんてこっちにも分からない。
イライラしているのかレミリアはもう一度槍を投げる。
槍はまた俺の目の前まできて――――弾けるように霧散した。
「……え？」
思わず出た一言。
霧散したのは間違いなくレミリアの仕業ではない。
正気を失っていて俺を殺そうとしている奴がそんなことをするはずがない。
再度飛んでくる槍、それに対しやや怯みながらも両腕を出す。
槍は目の前まで来ると手に当たるか当たらないかの距離で弾けた、周りには誰もいない。
「やっぱり…」
恐らくだが、槍を霧散させたのは俺だ。

誰かが助けてくれたのなら今のを防ぐために必ず姿を見せるからだ。
まさか俺にそんな隠された力が…!?
まあそんな冗談はさておき。
「やって…みるか」
痛い体に鞭を打って立つ。
正直、体の状態は最悪だ。
全身は痛いわ、擦り傷に切り傷はあるわ、目も霞んでるわで限界に近い。
だけど、今ここで動かないと彼女が、レミリアが辛そうだから。動くしかない。
立ち上がった俺を恐れるように後ろへ下がるレミリア。
しかし俺はゆっくりと彼女に歩んでいく。
「ッ…!!こなイで、こないでこないで!!!」
彼女は発狂しながら槍を投げる。
しかし狙いが大きく外れているので俺には当たらない。
ゆっくりと一歩ずつ進む。
「…おい、いつまでふざけてんだ」
「ひッ…!!?」
「この館の当主のお前が…そんなザマじゃ、駄目だろ」

歩きながら精一杯叫ぶ。これが俺の今の気持ちだ。
息も絶え絶えで今にでも倒れたいが、なんとか踏ん張って歩く。
段々と距離が近くなるにつれて徐々にレミリアが焦っていく。
「イや、いやイや嫌――――!!!邪魔…シナいでッ!!」
彼女の頭上に黒い雫みたいな物が集まっていく。
それらはやがて大きな水の塊と化し、そしてドス黒くて巨大な槍へと変わる。
「フふふ…アハハハハハ!!!!」
狂気に満ちた笑い声を上げるレミリア。
それはまるで勝ちを悟ったかの様なその笑い声だ。
「コレデ…終わリィいい!!!!」
叫び声とともに槍がこちらに向かってくる。
正直言うと逃げたい気持ちでいっぱいだ、だがここで動かないと絶対に公開する気がする。
何でだろう、何で見ず知らずの少女を助ける為にここまでするんだろう。
自分に問う、何がしたいのか。
そんな事…とっくに決まっている。
俺は――――

「ただ目の前で苦しんでいる女の子を見ていられないだけだ!!」
そう全力で叫ぶ、その叫び声に押し負けるかのように槍は消えた。
その事によりレミリアは一瞬だけ隙ができる。
その隙を逃さないとばかりに俺は走って彼女を抱きしめた。
鉄くさい匂いとぬめっとした感触を感じる、それでも俺は彼女を抱きしめる。
「やめろ…ヤメロヤメロやめろやめてやめてやめて!!!」
必死にもがいて抜け出そうとする彼女を死に物狂いで抑える。
そんな彼女の頭に手を置いて、諭すように喋りながら頭を撫でる。
「怖がらなくてもいい、俺は何もしない。だから…安心しろ」
「ッ…!!」
彼女の動きがピタッと止まる。
よく見ると彼女に纏わり付いている黒いものが薄れてきている。
「お前に何があったのかなんて、俺には分からない。ただ…俺は、お前の敵じゃ…ない」
「……」
元々ギリギリだった体のうえに、レミリアの抵抗を必死に抑え込んだことで体が上手く動かない。
おまけにもう瞼も重くて、今目を瞑ったら間違いなく意識を落とすだろう。

だがそれでも俺は彼女を抱きしめて撫で続ける。
もう少し…もう少しなんだ……
最後に無言で強く抱きしめる。
すると彼女に纏わり付いていた物が煙のように天へと昇った。
そして俺が抱きしめていたのは狂気に満ちた黒いものではなくこの館の当主、レミリア・スカーレットだった。
「すーすー……」
「良かっ、た…」
彼女が戻った事による安堵からか一気に体の力が抜ける。
抱きしめている彼女をもう一度見る。
寝ているようだが、その寝顔はとても可愛かった。
「俺も…少し、寝るか……」
そして俺はレミリアを抱きしめたまま眠るように意識を失った。

第３話

部屋に差し込む日差し。
部屋はとても静かで外で風に揺られる木々の音が微かに聞こえるくらいである。
部屋の中にはベッドとテーブルの二つしか置かれていなく、非常に質素に見える。
一見、誰もいない様な部屋だと思うが、その部屋のベッドの上では１人の青年が眠っていた。
そして、その隣には――――

――――

目が覚める、どうやら死んではいなかったようだ。
だがしかし起き上がる事が出来ない、それに体が痛い。
「ここは…」
確か…俺はレミリアって女の子に殺されかけたんだっけ。
最初の方は光の球だったけど途中から正気を失って赤黒い槍を出してきた。
その槍は馬鹿みたいな威力で俺の体はボロボロにされた。
既に満身創痍（ぼろぞうきん）だった俺は気合で意識を保ってレミリアに近づいた。

当然ながらレミリアは俺に槍をぶつけてくる。
もう詰んだなと思ったけど不思議な事に一撃必殺みたいな威力を持つ槍をかき消してしまった。
それでレミリアを抱きしめて何か言った後気絶したんだな。
そこまで考えてふと、体にかかる重さに気づいた。
「うっ……うう」
体にかかっている重さの正体に目を向ける。
そこには新品同様に綺麗なドレスを着ているレミリアが苦しそうな様子で寝ていた。
「…おい、大丈夫か？」
体が動かないので声をかける。
しかし起きる気配が無い。
どうしたものかと考えていると、部屋の扉が開く。
「失礼します」
言うと共に部屋に入ってくる女性。
俺はこの人を知っている。
白髪でメイド服の美人の十六夜さんだ。
「えっと…こんにちは、十六夜さん」

「はい、こんにちは」
十六夜さんは俺に挨拶と一礼をするとレミリアの所へと近づく。
彼女はレミリアの肩を持って優しく揺さぶる。
「お嬢様、日が出ていらっしゃいますよ」
「……うにゅ?……しゃく…や?」
「……ブフォ」
「??」
レミリアがまだ眠そうな様子で目をこすりながら顔を上げる。
そんな彼女が寝ぼけながら発した言葉を聞いて十六夜さんは手で鼻を覆う。
その手から少しばかり血が滴り落ちたように見えたが、気のせいだったみたいだ。
「…はい、お嬢様。既に日が出ていますので大広間にお越しください」
そう伝えながらどこからか持って来た濡れているタオルでレミリアの顔を拭く十六夜さん。
顔を拭かれた事で完全に目を覚ましたレミリアは背伸びをする。
「う～…!あー、よく寝たわ。咲夜ー、今何時?」
「朝の十時前後かと」
「そんなに寝てたの?まぁいいわ、さっさと行くわよ」

「お客人はどうしましょうか？」
「動けたら行かせるけど……まだ治ってなさそうね」
こっちを見て渋い顔をするレミリア。
確かに今俺は体が動かせないので何処かへ移動などできるはずも無い。
うーんと考えるレミリアは十六夜さんに命じた。
「取り合えずパチェに治してもらうように言って、移動は美鈴にさせて頂戴。それまで私はここに居とくわ」
「かしこまりました、お嬢様」
そう言うと十六夜さんは消えた。
比喩とかの消えたじゃなくて、本当に目の前で消えた。
目の前で起こった現象に理解できずに驚いていると、レミリアがベッドに腰掛ける。
「驚いた？ま、うちの咲夜は〝時間を止める程度の能力〟を持っているから仕方ないさ」
「はぁ…？」
理解できない事がもっと理解できなくなった。
時を止める？そんな中二設定いらねーよ？
そもそも俺の中じゃ時を止められるのは石仮面つけて吸血鬼になったザ・〇ールドの使い手とスター・〇ラチナの使い手ぐらいしか知らないよ？

「…信じてない？」
「…あぁ、流石に信じられない」
少女が光の球を出したり、槍を出して部屋をぶっ壊したりしたのを見ても、流石に時を止められるんですよこいつと言われて納得はできない。
そんな俺の態度にムッとしたレミリアが、二つのサイコロをポケットから取り出す。
「じゃあ私が今から実践してみるわ。私が持っているのは〝運命を操る程度の能力〟よ、簡単に言うと私は人であろうが物であろうがその運命を自由に操れる事ができるの。ここにサイコロがあるでしょ？今からこれで能力を見せるから見ときなさい」
「分かった」
返事をすると、レミリアが二つのサイコロを同時に投げる。
サイコロはテーブルの上に落ちると５と６の目で止まる。
これじゃあ何も分からない、そう言おうとした時レミリアが喋る。
「――――サイコロよ、貴様は四の目で止まる〝運命〟だ」
レミリアがそう喋るとテーブルの上に落ちたサイコロはもう一度バウンドして両方とも４の目に変わった。
「どう？これが私の能力。分かりやすくするためにサイコロでやったけど、本当はもっと大きな物とかでも運命を操れるわ」

「おお…凄いな」
感嘆の言葉が出る。
サイコロという地味な物だったとはいえ、5と6の目だったサイコロが両方4の目になったのだ。
これは凄いと思うしかない、しかもこれが人などでも運命を操れると言うのだから恐ろしい。
俺に褒められたのが嬉しいのか、レミリアはややドヤ顔になる。
「でしょ?サイコロだと地味だとか言われて若干落ち込んでたのよ」
「いやいやそんな事無いと思うぞ。5と6だったサイコロが両方4になったんだし」
「そうよね!やっぱり、分かる人には分かるんだ…!!」
何か最初の時との口調と様子が違いすぎてやや驚く。
しかしこっちの方が可愛いので問題ない。
そんな事を思っていると、十六夜さんが扉を開けて入ってくる。
「お嬢様、連れて参りました」
「ご苦労、では大広間へ…と言いたい所だが先に博麗神社に向かおう。咲夜、付いてきてくれ」
「かしこまりました」

「では客人、私は用事があるので行かせてもらうぞ。治療はパチェに頼むがいい」
「は…はぁ」
　なんだか間抜けな返事をした後、レミリアと十六夜さんは部屋を出て言った。
　そして代わりに寝巻きみたいな服に三日月の小物がポイントの帽子を被った女の子と背中に小さな羽根が付いている赤毛の女の子が部屋に入ってきた。
「ゴホっ、ケホっ……全く、面倒な事を押し付けてくれるわね」
「美鈴さんを戻していいんですか？帰るときに大変ですけど」
「その時はこの人に背負ってもらうわよ」
「そうですか…。あっ、初めまして！私は小悪魔と申します!!こちらはパチュリー様です！」
「パチュリー・ノーレッジよ、よろしく」
「俺は上井和希です、よろしくお願いします」
　お互いに名前を述べると、パチュリーさんは咳をしながら分厚い本を３冊程テーブルに置く。
「早速だけど貴方の体を治すわ、じっとしてなさい」
「分かりました」
　パチュリーさんは俺の周りに何やら怪しい魔法陣みたいな物を描き始めた。

すると小悪魔さんが白い粉を持ってきた。
「これは睡眠剤です、これから行う魔法は少し痛みを伴いますのでこれで寝ていてください」
「は、はい」
言われるがままに小悪魔さんに粉を口に入れられて水を飲まされた。
即効性なのか、俺はすぐに瞼が落ちていく。
小悪魔さんに頭を撫でられている様な気がするがそんな事を気にせずに俺は深い眠りへと誘われた。

第４話

少女は森の中を歩いていた。
森の中は鳥のさえずりや木々が揺れる音が一切聞こえない。
それはまるで、森が少女を恐れているようだ。
少女は静けさが目立つ森の中を歩いて行く。
無闇に歩いているのかと思いきや、少女には目的地があった。
それは…この世界を支えている重要な神社である。
少女はそこに住んでいる巫女に用があるのだ。
「中々つかないな…」
ため息混じりに喋る少女は日傘を差しながら歩く。
その横にはメイド服を着た女性が少女に歩幅を合わせて歩いていた。
「お嬢様、やはり夜に出向かれた方が良いのかと」
「いや、それだとあの巫女が寝ている可能性もある。あの巫女を訪ねるにはやはり昼しかない」
「左様ですか。ではせめて空を飛んでは行かれませんか？このままでは時間がかかりま

すよ」
「帰りは飛んで帰るさ、それにここの森をなんとなく歩きたくなった。悪いか、咲夜？」
「滅相もありません」
「そうか、では日の暮れないうちに行くとしよう」
「かしこまりました」
その会話を境に少女と咲夜と呼ばれた女性は黙々と歩き始めた。
そして歩き続けるほど三十分、二人は神社へと繋がる石階段へと着いた。
「着いたな」
「はい」
「上るか」
「はい」
淡白な会話をした後、二人は疲れた様子を見せずに階段を上っていく。
そんなに長くは無い階段なので二人はすぐに神社の境内へと辿り着いた。
境内では白と紅の服を着た少女が掃き掃除をしていた。
「いらっしゃい。あら、珍しいお客さんね」
「久しいな、博麗の巫女。一年ぶりだな」
「あんたさぁ…その喋り方、何とかならないの？可愛くないわよ？」

「そうね、私も堅苦しいって思ってるのよ」
急に口調を変える少女、しかしこちらの方が年相応の喋り方で可愛らしく思える。
博麗の巫女と呼ばれた少女は箒を賽銭箱の横に立てかけると少女たちを奥に入るように促す。
「折角来たんだし、お茶でも飲んでく？」
「悪いけど結構よ。貴方に用があって来ただけだから」
「そう？ならいいわ」
博麗の巫女は素っ気無い返事を返して境内に戻る。
そして腕を組んで、面倒くさそうに尋ねる。
「で、一体何の用？」
「そんなに面倒くさがらなくてもいいじゃない…。まぁいいわ、これは貴方の仕事だしね」
「私の仕事？どういうことよ？」
「そのままの意味よ。貴方って下界と幻想郷を別つ結界を張ってるでしょう？」
「まぁ…そうだけど」
「つい先日、下界の者と見られる人間が私の館に入ってきたわよ」
その一言を聞くと、博麗の巫女は大きなため息を吐く。

「そんなの知らないわよ、ここ最近で結界が綻んだ事なんてないし」
「そうなの？」
「本当よ、下界の人間が入ってきたら絶対に何処かの結界の一部が壊れるわ」
「ふーん、でも私の館に来たのはどう見ても下界の人間だった。そうよね、咲夜？」
「はい、里の者達の服装が違います。そもそも人里から来た人であるなら、正気を失われたお嬢様を止められるはずがありません」
淡々と言い切る咲夜。
その言葉を聞いて、ますますだるそうな顔になっていく博麗の巫女。
「えー…それってもう異変に近いわよね？あなたが正気を失うなんてまずないもの」
「私も少し場覗かせて貰いましたが、異変が起こっている可能性が十分高いかと」
「えー…めんどくさいわね……」
「終わったら紅魔館（うち）で〝宴会〟開いてもいいわよ？」
「さっさとその人間に会わせなさい」
宴会…という単語を聞いた瞬間、少女は人が変わるかのように真剣な表情になった。
その光景に少女たちはやや引きながらも首を縦に振った。
「ええ、さっさと行くわよ。ついてきなさい」
「分かったわよ」

そう言って3人は空高く飛んでいった……
そしてその近くでは…
「あやや…これは大スクープの予感がしますよっ!!」
カメラで撮りながら喜んでいる謎の女性が飛んでいた。

「あら、目が覚めたみたいね」
パチュリーさんの言葉を聞いて目を開ける。
一体、どれほど時間が経ったんだろう。
睡眠薬で眠らされていたから時間が分からない。
そんな俺の様子を知っているのか、パチュリーさんが声をかけてくる。
「あれから貴方は二日程治療の為に眠っていたわよ」
「そんなに眠ってたのか…」
「まぁ、魔法の規模が規模だし仕方ないわね」
「えっ、魔法?」
俺を治していたのは魔法などというファンタジー世界で使われる物でしたーとかじゃないだろう。
冗談も程ほどにして欲しい。

「疑っているの？」
「うん、まぁそんな物幻だと思っているから」
「幻じゃないわよ」
「いやいや、流石に信じられないよ」
「じゃあ見せてあげる」
そう言って両手を出すパチュリーさん。
何をするのかと思いきや、左手から氷右手から炎を出した。
しかも両方とも手につかずに浮いている。
「マジか…」
「本当よ、言っておくけど手品とかじゃないわよ。試しに合わせて見るから見てなさい」
パチュリーさんは右手と左手をゆっくりと近づける。
炎と氷が合わさる事なんて絶対に無いと思うが、近づく炎と氷を俺はじっと見ていた。
炎と氷はゆっくりと近づいていき炎が凍りを溶かすかとしたその時、炎と氷はくっついた。
「なっ…!?」
氷は炎を覆い、炎は氷を溶かさずに中で燃えている。

その綺麗さに一瞬見とれてしまった。
これは納得せざるを得ないな、魔法の存在を。
俺が驚きながら納得したのを察したのか、パチュリーさんは炎と氷を消す。
「信じたみたいね」
「まぁ、目の前であんなもの見せられたら信じるしかないよ」
「そう…それじゃあ私を運んでくれる？」
「はいはい…って無理無理っ！まだ体が動かないんだよ！」
いくら治療したとはいえすぐに動けるものじゃないだろう。
俺がそう言うと、呆れたようにパチュリーさんが言った。
「大丈夫よ、貴方の体はもう治してあるのよ。それに美鈴は門にいるし、こあは本の整理をさせるために帰らせたの。だから私が帰るには貴方が運ぶしかないの。頑張って立ちなさい」
「分かったよ…」
ゆっくりと手を動かそうとする。
しかし体は全く動かない――なんて事は無く普通に動いた。
そのまま落ち着いてベッドを降りて置いてある俺の靴を取る。
そして軽く柔軟運動をして体が動くかを再確認する。

「動くわね、それじゃあ私を運んで」
「それは別にいいけど…どうやって運ぶんだ？」
「背負ってくれて構わないわ」
「分かったよ」
腰を降ろしてパチュリーさんをおんぶする。
やや重いがそれほど問題ではないので立ち上がる。
しかし、ここである問題が発生した。
「……どうしたの？」
「あっ、いや、なんでもない」
その問題はパチュリーさんにあった。
彼女を背負う事により彼女の豊かな胸が押し付けられるのだ。
俺の体を治してくれた人とは言え、この状況じゃ邪な考えも湧いてしまう。
しかし…胸でかいな、パチュリーさん。
俺の反応に首を傾げるパチュリーさん。
とりあえず俺は邪念を振り払う為に目的の場所を聞く。
「何処に行けばいい？」
「私が道を案内するからそれに従いなさい。まず左に進んで」

「分かった」
言われるがままに左方向へと歩いていく。
そして十分程歩いたら上下に続く階段の所に着いた。
「その階段を下に降りて」
階段を降りていく。
若干寒気を感じるが、気のせいだろう。
だけど、背負っているパチュリーさんが震えていたから気のせいじゃなかった。
「大丈夫か？」
「えぇ、これくらいなら…へくちっ」
強がりながら可愛らしいくしゃみをするパチュリーさん。
どう見ても寒そうだったので、一旦彼女を降ろす。
「ちょっと、どうしたのよ」
「パチュリーさんが寒そうにしてるからな。ちょっと待ってろ」
そう言うと俺は上着を脱ぐ。
そうすると俺は肌着一枚になって寒いけど仕方ない。
そして俺は脱いだ上着をパチュリーさんにかける。
「こうしたら寒くないだろ」

「でも貴方が寒いんじゃないの？」
「パチュリーさんは俺よりも薄そうな服着ていて寒そうだからな。俺なら我慢できるし」
「よくこんな事ができるわね？」
「そういう性分なんで」
そう言うと再びパチュリーさんを背負う。
肌着一枚でとても寒いが、女の子に風邪でも引かせたら大変だ。
なら俺が気合いで我慢するしかない。
そして歩くのを再開する。
「…優しいのね」
そう呟いたパチュリーさんは、何処と無く嬉しそうに呟いた。

第５話

「着いたわ。ここが目的地よ」
「そ、そうか…」
息を切らしながら返事をする。
ここがパチュリーさんの目的地であり、着いたわけだが…
「はぁ…はぁ…」
超遠い、まるで嫌がらせのように遠い。
階段下りてから真っ直ぐ進んで２０分ってありえるか？
俺がいたあの部屋からもう３０分程歩いていたんだぞ。
しかも人一人背負っている状態だったからもう限界だ。
「ありがとう、あと少し頑張って頂戴」
「分かってるって」
頑張って足を動かし、扉を開けて中へと入る。
中はとても広く、周りには至る所に本棚があってそこに本が置いてある。
「凄いな…。図書館か？」

「ええそうよ。本が見たいなら、こあを付けて見せてあげるわ」
「あぁ、よろしく頼む」
「分かったわ。じゃあ奥に大きい椅子があるでしょ?そこまで運んで」
よく見ると奥の方に座り心地の良さそうなクッションみたいな椅子がある。
しかし…
「遠いな…」
「…気合よ」
軽く５００ｍはあるな、これ。
というか５００ｍも幅がある図書館って凄いな。
やや驚きながら重い足を動かせる。
ゴールは目の前なんだ、すぐ着くはずだ。
そして半分ほど歩き続けると、小悪魔さんが本棚の角から現れる。
「あっ、パチュリー様と上井様!どどっ、どうしたんですか!!?」
小悪魔さんは明らかに驚いている。
まぁそりゃ、肌着一枚の男が女の子背負ってたら驚かれもするだろう。
仕方の無いことだ。
しかしパチュリーさんはバツの悪そうな顔で答える。

「ちょっと運んで貰っていたのよ、私の椅子までね」
「そ、そうですか…。あれっ？でもパチュリー様は確か転移魔法を使う事ができたのでは？」
「うっ…」
　痛いところを突かれた様な顔になるパチュリーさん。
　え？まさかテレポみたいなのができたりしたの!?
　それじゃあ俺の努力って一体…？
「でもあれは魔力を結構消費するわけでっ…！」
「結構消費するって言っても、パチュリー様の膨大な魔力の前では小さな物ですよね？」
「むきゅ…！」
「小悪魔さん、その話…本当ですか？」
　目は向けられないけどパチュリーさんに問いかける。
　しかしパチュリーさんからの返事は無い。
　代わりに小悪魔さんが返事をする。
「はい、本当ですよ。なんたってパチュリー様は偉大な魔法使いですから!!」
「パチュリーさん……」
　まさかそんな便利な物があったなんて…

つまり俺の努力はまったくの無駄だったて事になるのか。
悲しいな…。
「こあ…後で覚えときなさい」
「ええー!?何でですか――――あ、そういうことですか!!」
パチュリーさんの言葉から何かに気づいた小悪魔さん。
そして顔をニヤケさせて俺の周りをぐるぐる回りながら喋る。
「ねぇねぇ、どんなお気持ちですかー?パチュリー様が気に入られた殿方に密着できてどんなお気持ちですかー?」
「……」
絶句するパチュリーさん。
相当煽ってくるな…小悪魔さん、かなりうぜぇ。
この状況を放っておくのは流石に酷なのでパチュリーさんに助け舟を出す。
「ま、まぁその辺にしないか?きっとパチュリーさんも疲れていたんだよ」
「そうですか~?意外とわざとやったのでは~?」
「わざとであろうがなかろうが別にいいだろ」
「上井様もそんなに否定なさらず~♪」
「むきゅ……」

「それくらいにしとけよ」
ついいつもより低いトーンで言ってしまった。
カッとなるとやってしまう俺の悪い癖だ。
でも俺は執拗に煽ってくる奴は嫌いだから仕方ない。
小悪魔さんはさっきとは違う俺の声を聞いて、ビクッと驚く。
「は、はいぃ！すみませんでした!!」
そう言って一度平謝りすると、猛スピードで走っていった。
それはもう脱兎という表現がぴったりなくらいに速かった。
小悪魔さんが去っていったので俺は再び歩き出す。
そして歩きながらパチュリーさんに優しく喋りかける。
「大丈夫か？でたらめな事を煽られるのは腹立つよな」
「…うん」
「まぁパチュリーさんが瞬間移動みたいな物が使えるのは驚いたけどな」
「…うぅ」
「でもそのせいで疲れているんだから、これは仕方ないことだ。なら俺が責任を持って運ぶのが筋ってもんだろ？」
「……そう…ね」

パチュリーさんの返事を聞くと、会話が終わる。
そのまま歩き続けてパチュリーさんが言った椅子に着いた。
俺はパチュリーさんを優しく降ろす。
「到着だな。さて…どうしようか」
「…本でも見ていかない？」
「あぁ、それがいいな。やる事もないし」
「何の本がいいの？」
「それじゃここら辺の地理についての本で」
「…ごめんなさい、それはないの。私達もつい１０年前にここに来たんだから」
「そうか…」
そもそもの話、俺は一体何処の国に飛ばされたのかが分からない。
日本にはいないだろう、日本にこんな屋敷があったら少なからず観光名所になるし。
となると外国に飛ばされたという線が強いだろう。
俺の予想ではヨーロッパの国辺りだと思うけど…言葉が通じてるしなぁ……。
そんな俺を見てパチュリーさんが喋る。
「なら私がここについて説明してあげるわ。こあ、椅子を一つ持ってきて。あとここの地理についてまとめた書類もお願い」

まるで小悪魔さんがいるかのように喋るパチュリーさん。
何をしているんだろうとか思っていたら小悪魔さんがすぐ走ってきた。
彼女の手には椅子と４枚の書類があり、それをパチュリーさんに渡すと猛ダッシュで行ってしまった。
「この書類は私が知っている限りでの情報で作成したここの情報よ。大雑把な情報だけど、役に立つと思うわ」
「そうか」
書類を受け取り目を通す。
書類には色々記されていた。

【幻想郷】
妖怪の賢者と呼ばれる、八雲紫（やくもゆかり）が創造したとされる場所。
現在自分たちを含め、妖怪や人など多種多様な生き物が生息している。
幻想郷は元々人がいた世界、下界から切り離された世界である。
そのため、下界の人間がこちらの世界に来る事は多少ある。
しかしその場合、八雲紫や幻想郷を覆っている結界の修復などに携わっている博麗の巫女が下界から迷い込んだ人間を元の世界へと送り返している。

【博麗の巫女】

幻想郷における人と妖怪とのバランスを保つ役目を担う巫女。

その力は代々強力であり、現代の巫女である博麗霊夢は〝弾幕ごっこ〟と呼ばれる、殺さない為の戦闘を編み出した巫女だ。

しかし彼女は自分の役目に対する行動意識が低く、度々その事を八雲紫に注意されている。

そんな彼女だが、やる気になると誰よりも頼り強い存在になる。

【弾幕ごっこ】

博麗霊夢が生み出した殺さないための戦闘。

基本的にスペルカードと呼ばれる自身の技を練りこんだ札を3枚使う。

ただ勝てば良いと言う物ではなく、美しさや技の構成などを見る事もある。

【異変】

稀に自分たちの望みを叶えようとして、幻想郷に悪影響をもたらそうとする時の呼称。

基本的に博麗霊夢とその友人らが解決に動き、終わった後は異変を起こした側が宴会を開き全てを酒に流す。

――――

書類の一枚を読み終わった事で、ある疑問が生まれた。
「なぁ、これに書かれている下界の人間が迷い込むって……」
「ええ、貴方みたいな人間を指すのよ」
「いや、でもまさかそんな事が」
「あるのよ。現にこの紅魔館に人間である貴方がいるのは可笑しい事だもの」
「そうか……」
これを読んでいて可笑しいとは思ったんだよ。
日本にはそうそうないはずの目立つ館とかあるし、メイドさんはいるし、当主が吸血鬼とかいう想像上の物だし。
ここは日本じゃないと思っていたがまさか世界が違ったなんて。
でも博麗の巫女の博麗霊夢か八雲紫に会えば元の世界に戻してもらえるはずだ。
当分の間はそれが目標だな。
薄々ここは違う世界だと感じていたため、さほど驚きはない俺。
パチュリーさんはそんな俺を見て、問いかけた。
「で、どうするの？貴方がここに居たいって言うならレミィは歓迎すると思うし、帰りたいなら手伝うわよ」
「うーん…怪我を治してくれたのはありがたかったけど、俺は帰るわ。家族とか友達と

か心配だし」
「……そう、分かったわ」
そう返事を返すパチュリーさんはどことなく寂しそうだった。
しかし直ぐに元のクールな顔に戻って立ち上がった。
「それじゃあまずは霊夢に会わないとね」
「そうだな」
「私に何の用かしら？」
意気込んだ俺とパチュリーさん会話に割って入るように一人の声が聞こえる。
俺は声が聞こえた後ろの方向を向く。
そこには紅と白の大きいリボンが特徴的な少女がこっちに向かって歩いていた。
パチュリーさんはその顔をみるなり、めんどくさそうな顔になっていく。
「貴方…なんでここにいるのよ」
「少しあんたの所の当主に頼まれて来たのよ。下界の人間がいるのよってね」
「魔理沙は？貴方がいるなら一緒にいると思うのだけれど」
「残念、魔理沙はいないわよ。家にいなかったからどこかできのこでも食べてるんでしょ」
「そうね。で、何の用事なのかしら？」

魔理沙というキラキラな名前が出てきたが、それについて追求すると話が長くなりそうなのでしない。

というより、まさかこの子が博麗霊夢か？

パチュリーさんも霊夢って呼んでたみたいだしきっとそうに違いない。

これで帰れる…良かった。

安心と喜びを顔に出していると、博麗さんがじろじろと見てくる。

「ふーん…どうやらこいつが下界から来た人間みたいね」

「えぇそうよ」

「確かに服装も違うしそもそもここにいるのが可笑しいし…」

「そんなに珍しいの？」

「そりゃ珍しいわよ、正気を失ったレミリアを元に戻したなんて話を聞いたらね」

「…何が言いたいの？さっさと彼を下界に戻しなさいよ」

興味深そうに俺を見る博麗さんに痺れを切らしたのか、パチュリーさんがややイライラして言う。

その言葉を聞いて博麗さんが首を横に振って答える。

「悪いけど、それはできないわ。少なくともこいつが異変に関わっている限りね」

「異変に関わっている？別に俺は何もしていないぞ」

俺が否定すると、博麗さんが俺に目を合わせる。
「初めまして私は博麗霊夢、霊夢って呼んで。悪いけど、今回貴方は異変に関わっているわ」
「何でそんな事が分かるんだよ」
「詳しい事はレミリア達と一緒に話すわ。いいから行くわよ」
「待ちなさい」
俺を強引に連れて行こうする霊夢さんをパチュリーさんが止める。
「何よ？」
「私も行くわ、だから彼を離しなさい。後で合流するから」
「…分かったわ、じゃあ大広間に集合よ」
そう言うと霊夢さんは部屋を出ていった。
するとパチュリーさんはため息をつく。
「はぁ…面倒な事になったわね」
「そんなの俺に聞かれても」
「分かってるわ。とにかく今やるべきは霊夢の話を聞く事よ、彼女が帰さないというなら帰してもらえないしね」
「…そうだな、じゃあ行くか」

「私が転移魔法を使うから、私を背負って頂戴」
「りょーかい」
またパチュリーさんを背負う。
しかし今度は歩かなくてもいい、パチュリーさんが瞬間移動もとい転移魔法を使って移動するのだから。
そう思いながら、俺とパチュリーさんは部屋から消えた。

第6話

本がたくさんあった部屋から一瞬にして大きな広間に移動した。
転移魔法って便利だなー、最初からこれを使っていればなー…。
しかし過ぎた事に文句は言えない。
そう思いながら、俺は周りを見る。
どうやら着いた場所には霊夢さん、レミリア、十六夜さんの三人とよくできた人形を持っている金髪の少女が椅　子に座っていたようだ。
…ん？霊夢さん、あなた何で俺たちよりも早くいんの？
転移魔法なる瞬間移動をした俺とパチュリーさんより早いなんて。
こいつ何て脚力してんだ、いやいやそう言う話じゃない。
「いやーやっぱり楽ね、あんたんとこのメイドに運んでもらうと」
「霊夢…貴方、重くなりましたね」
「やかましい」
あ、そういう事ね。
十六夜さんには時を止められるというチートがあるの忘れてたわ。

時間止めて霊夢さん移動させたらそりゃ俺たちよりも早いわけだ。
それにしても十六夜さんは霊夢さんを運んでここまで来たのか…
ここがどこにあるのかは知らないけどお疲れ様です。
「パチェも来たの？」
「ええ、彼を送るついでよ。暇だし話ぐらい聞いておこうと思って」
「そう、あんまり無理しないでね。じゃあ今から異変について会議しましょう」
レミリアはパチュリーさんを心配した後、椅子から立ち上がった。
そして俺はパチュリーさんに連れられて彼女の隣の椅子に座る。
そしていよいよレミリアが喋ろうとした時、十六夜さんが手を上げた。
「お嬢様、美鈴とフラン様は召集しなくても良いのでしょうか？」
「美鈴は寝ているだろうし、フランも寝ているだろう。今は寝かしときなさい」
「かしこまりました」
「よし、じゃあ説明するわよ」
十六夜さんは質問を終えると静かに席に座る。
そしてレミリアが説明を始める。
「まず今回、私が正気を失った事についてよ。そもそも５００年も生きている私がそうそう正気を失って暴れる事はない。だが数日前、私は緩やかに狂っていく自分を自覚し

た。よって太一がここに来る数日前、私は咲夜に命じて自ら密室に閉じこもった。だけどまさか太一が入って来るのは意外だったわ」

そこまで言うと、レミリアは十六夜さんに目を向ける。

十六夜さんは若干バツの悪そうな顔になるが、直ぐに元の表情に戻る。

「申し訳ありません。お嬢様が閉じこもってから数日経ち、それを狙っていたかのようなタイミングで現れた上井様を事件の関係者かと思い疑ってしまいました。上井様、大変申し訳ありませんでした」

「別に死んではいないし、大丈夫だ。話を続けてくれ」

そりゃそんなタイミングで来られたら俺も疑う。

つまりあれは仕方のなかったことだ。

ってそれより、レミリアが５００年も生きている?

普通に考えて嘘だろと思いたいがここは俺の常識では考えられない事が多くあるから嘘じゃないだろう。

その証拠に、俺以外の奴は平然としている。

なんて思いながら、話は続く。

「まぁいいわ。結果的に私は救われたんだから許す」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、話を続けるわよ。
部屋に入って来た太一を私は面白がって弄んだ。ほんと、よくあれに耐えれたわね。それで私の遊びをクリアして、まだ僅かに残っていた理性で逃がそうとしたけど黒いものが私にまとわりついて来た。これから後は、太一と咲夜が説明して。悪いけどあれから後の記憶が無いの」
「かしこまりました。ではまず上井様からどうぞ」
おぉう、いきなり来たな。
でも当事者は俺とレミリアと十六夜さんだけだし……ん？十六夜さんは当事者か？
十六夜さんについて首を傾げると、十六夜さんがまたも頭を下げる。
「申し訳ありません。あの時の中の様子は時を止めて大体把握しておりました。万が一貴方に死なれれば色々と面倒ですので」
「そ、そうですか…」
時を止めて中の様子を伺っていたのか十六夜さん。
もしかしたら俺が死にかけたら助けてくれたのかもしれない。
……それはなさそうに見えるけどなぁ。
だって俺けっこう死にかけてたし、最後の方とか部屋が凹む威力の槍投げられてるからな。

十六夜さんに抗議の目を向けると、にこりと殺気の篭った微笑みを返された。
あ、これはわりとマジなやつだ。
そう思いすぐに十六夜さんから視線を外す。
「…えーと…じゃあレミリアに代わって説明させてもらうぞ。まぁ途中まではレミリアが言っていた事と同じだ、でも黒い何かがレミリアを覆うと文字通り狂ったんだ。俺に赤黒い槍みたいなのを投げてきたり、ずっとぶつぶつ呟いていたしとにかくやばかった」
「赤黒い槍…？もしかして…」
「えぇ霊夢、その通りよ。その槍は私のスピア・ザ・グングニルね、ただしスペカで威力を抑えてないフルのやつね」
「貴方…自覚してやってたなら封印してたところよ」
「分かってるわよ、あの時は狂っていたから仕方ないでしょ。私も覚えてないんだから」
「それもそうね。あ、話を戻していいわよ」
「分かった。普通ならあの場面で多分その槍を食らって終わりだった。でもよく分からないけど俺には当たらなかった…いや当たる前に掻き消えたんだ。それで俺はレミリアの所まで走って彼女を説得して気絶した」
説得した内容は結構恥ずかしい内容だったのでここは伏せておく。

だけど俺の知っている事は全て話した、ここで嘘ついても意味は無いし。
話を聞き終えた霊夢さんが十六夜さんに聞く。
「大体同じような感じ？」
「えぇ、全く同じよ」
「そう…えっと、太一だっけ？ちょっとこれに触れなさい」
そう言って霊夢さんは一枚のお札を手渡してくる。
特に断る理由がないのでそれを受け取る。
何か起こるのかと思いきや、何もなかった。
何故札を渡してきたのかを霊夢さんに聞く。
「何でこんなものを？」
「あんたの話を信じるためよ。実はその札、私以外が触ると青く光るようにしてあるのよ。嘘だと思うなら他の奴に渡してみなさい」
「へー…」
やや半信半疑で隣にいるパチュリーさんに札を渡してみる。
するとパチュリーさんの手元に渡った札は青く強い光を放った。
結構キツイ光だったので素早くパチュリーさんから札を返してもらう。
「光強くね!?」

「目くらまし程度だから大した事ないわよ」
「そういう物なのか!?」
「そんな物ね。ほら返しなさいよ」
「お、おう」
催促されて札を手渡すと素っ気無く札を取る霊夢さん。
とてもと言うほどでもないけど男勝りなんだなこの人。
そう思っていると霊夢さんに睨まれました。
「あんた今変な事考えなかった…？」
「い、いや特に何も」
「……そう」
そう答えて自分の席に戻る霊夢さん。
あの人はエスパーなのか。
怖ぇー……
そんな霊夢さんは椅子に座ると俺に白いカードを3枚投げて渡してくる。
「餞別よ、能力がある奴に渡しているの」
「これは？」
白いカードを見つめながら霊夢さんに聞く。

見たところ、何の変哲も無い普通のカードだ。
「それはスペルカードよ、ただし何も入ってない素の状態だけどね。弾幕ごっこに必要だから持っておきなさい」
「あぁ…分かった。けどこれどうやって使うんだ？」
「能力使ったら適当にできるわよ」
「…そうか、ありがとな」
「どういたしま――――」
霊夢さんがどういたしましてと言う途中で大きな揺れが発生する。
それと同時に部屋の電気も消えて周りが暗くなる。
皆が慌てる（特にレミリア）中、十六夜さんが火の灯った蝋燭を持ってくる。
「皆様落ち着いてください。先程の衝撃ですが、どうやら原因は外にいる何者かの襲撃かと思われます」
「どうしたの咲夜⁉その鼻血は⁉⁉」
蝋燭の明かりに照らし出された十六夜さんは鼻からポタポタと血を垂らしていた。
それに驚いて心配するレミリア、涙目になっていて若干可愛い。
そしてレミリアの顔を見た十六夜さんは一瞬顔がにやけたかと思ったけど気づいたら元のクールな顔に戻っていた（ついでに鼻血もふき取られていた）。

前々から気になるけど、この人ひょっとして同性を愛せる人か……？
そんな疑問は置きつつ、周りの状況を確認する。
「一体何が起こったんだ!?」
「誰かがこの館に攻撃したのよ。私の魔法によると…氷妖精ね」
そう言いきるパチュリーさん。
吸血鬼だけでなく妖精とかもいんのかよ……
何でもありだな。
「パチェ以外全員外の様子を見に行くわよ！」
「かしこまりました」
「めんどくさいわね…」
「わ、分かった」
先程まで慌てふためいていたレミリアがサッと立ち上がる。
それに合わせて霊夢さんと十六夜さんが立ち上がる。
俺も立ち上がるとパチュリーさんが何処からか取り出したのか、分厚いコートを手渡してくる。
「これを持って行きなさい。相手は氷妖精、慣れてないあなたが丸腰で行くと凍死するわよ」

「あぁ…ありがとな」
「……気をつけてね」
「ん？今なんて？」
「…何でもないわ」
パチュリーさんが何を言ったかは分からないけど、先に行くレミリアの後を追って俺は立ち上がって部屋から出た。

第７話

レミリアの後を付いて行って五分程で館の外へと出る。
館の外はとても寒くコートが無いと死んでしまいそうな寒さだった。
それに加えて猛吹雪で視界がかなり悪い、１０ｍ先が見えないぐらいだ。
ちなみに、そんな外をコート類を着ないで平然と歩いているレミリアと十六夜さんと霊夢さんは色々と可笑しいと思う。
しかも十六夜さんとレミリアは半袖だし、寒くないのかよ。
「うぅ…少し冷えるわね」
「私も同感ね。咲夜、氷妖精を倒し終わったら温かい紅茶をお願い」
「かしこまりました。では皆様…始めましょうか」
「「そうね」」
霊夢さんとレミリアが返事をすると同時にパッと吹雪が止む。
まつ毛に積もった雪を払って前を見るとそこには水色の髪の女の子が……浮いていた。
しかも彼女の背中には氷の塊みたいな物が浮いている。

「う…浮いてる？」
「あら、そんなに驚くものなの？ここの人間は能力持っている奴らは大抵飛べるわよ？」
レミリアはさして驚いていない様子で俺に言う。
ここの人間は浮けるのか…驚きだな。
なんかもう常識どーのこーの言っているのが辛くなってきた。
よし、これからは割り切っていこう。
そうした方が気が楽だ。
色々考えていると、霊夢さんがめんどくさそうにため息を吐いた。
「はぁ…やっぱりチルノね」
「チルノ？霊夢さん、ひょっとしてあの子と知り合いなのか？」
「さん付けはやめなさいよ、なんか気持ち悪いわ。普通に霊夢でいいわよ」
「そうか。じゃあ霊夢、あの子は？」
俺は空中に浮いているチルノと呼ばれた女の子に指を指す。
「えーと…後でじゃ駄目？」
「あぁ、出来れば今説明して欲しい」
「はぁ…分かったわよ」
俺がそう答えると、霊夢はまたため息を吐く。

本当に面倒くさがりな性格をしているなと思う。
でもなんだかんだ言って説明してくれるからきっと根は優しいんだろうな。
そう思っていると霊夢が喋り始める。
「あいつはチルノっていうここら辺に住んでる氷の妖精よ。あいつは妖精の中で特に無鉄砲でバカだから度々勝負を挑まれたりするのよ」
「妖精っていうと自然の化身みたいなやつか？」
「えぇ大体はそれで合ってるわ。他に何か聞きたい事はある？」
「氷の妖精って言ってたけど…具体的には何が出来るんだ？」
「冷気を操って物を凍らしたりすることが出来るわね。夏は重宝される能力よ」
「そうか、つまり今ここが物凄く寒いのはチルノのせいなんだな？」
「えぇ多分そうね」
一通りの質疑応答が終わると浮いているチルノが叫んだ。
「あたいはさいきょーのチルノよ！今すぐ勝負しろー！」
無邪気で自身満々な様子のチルノを見たところ、特に正気を失っているというわけじゃない。
本当に勝負を挑みにきただけらしい。
彼女が正気を失っていない事を知って、めんどくさそうに前へと出る霊夢。

霊夢は服の袖からお払い棒みたいな物と3枚のスペルカードを取り出す。
「はぁ…どうやら正気のようね。じゃあ私一人でやるから、あんたたちそこで見てなさい」
「何言ってるのよ、私の館が襲われたのだから私がやるわ」
「はぁ?これは私が買った喧嘩よ、手出ししないで」
霊夢がいざ勝負を始めようとしようとしたが、直前にレミリアが割って入った。
彼女の言い分は分かると思う、俺だって人に殴られたら殴り返すしな。
レミリアと霊夢の口論は3分程続いた末、何故か十六夜さんが出る事になった。
どう口論したらそうなるんだ一体。
「じゃあ咲夜、お願いね」
「かしこまりました、お嬢様。紅魔館付近を二度と近づけないように〝懲らしめて〟参ります」
「うん、頼んだわ」
レミリアと霊夢に一礼した後、十六夜さんは前に出て空を飛ぶ。
あの人も空を飛べるんだな…そんな事を思っているとチルノが腕を組んで自身満々に笑う。
「ふふふ!霊夢もとうとうあたいのさいきょーさに怖気づいたようね!!」

「…ふふっ」
「何笑ってんのよ！」
「いえ…貴方の無謀さに笑ってしまいました。どうかお気になさらず」
「むーっ！あんななんか直ぐにやっつけてやる!!」
十六夜さんの挑発に乗ったチルノは怒りながらスペルカードを3枚取り出す。
そして十六夜さんとチルノの勝負が始まる。
「それではそちらからどうぞ」
「言われなくてもやってやるわよ!!【氷符：アイシクルフォール】！」
チルノはスペルカードの一枚を掲げる。
すると十六夜さんの頭上に先が鋭くなっている氷の塊が形成される。
それはかなり広い範囲の攻撃で俺たちにも氷塊が降り注いでくる。
「こらチルノ、危ないでしょ！…ったく仕方ないわね」
チルノに注意する霊夢はお札を床に貼り付ける。
そして俺とレミリアに自分に近寄るように言う。
「あんたたち、私の側にきなさい！」
言われるがまま霊夢に近づいた俺とレミリア。
それを確認すると霊夢が目をお払い棒を振る。

「二重結界」
霊夢が言うと、水色のバリアが俺たちを覆う。
展開されたバリアは落ちてくる氷塊を見事に防いだ。
「凄いな…」
「何言ってんのよ。あんたもこれくらいできるようになるわ」
涼しい顔で答える霊夢。
俺もこんな事ができるようになるのかと思いながら十六夜さんとチルノに視線を戻す。
十六夜さんはチルノの攻撃を次々と避けていく。
しかしどうやって避けているのかが分からない。
疑問に思っているとレミリアが『咲夜には時を止める力があるじゃない』と言われてあぁそうだったと思った。
つまり時を止めて攻撃を避けているってことか。
果たしてこの人と弾幕ごっこして勝てる人間はいるのだろうか。
まあそんな事はどうでもいいので再度視線を戻す。
「どうして当たらないのよ!･さいきょーのあたいの攻撃はよけられないはずなのに!!」
「最強?･ふふっ、私には止まっている様に見えますけど」

「うるさいうるさい！絶対にあたいは負けられないのよ!!【吹氷：アイストルネード】!!!!」
チルノはもう一枚スペルカードを掲げて叫ぶ。
すると降り注いでくる氷が消えて彼女の周りに８個もの巨大竜巻が発生する。
竜巻はチルノの周りでごうごうと音を立てて回っている。
「氷の塊の次は竜巻ですか。単純ですね」
「ふっふっふ!!甘く見てると痛い目みるよ!!」
「やれるものならばどうぞ」
「いけーっ！」
チルノは竜巻を十六夜さんに向かって移動させる。
８個の竜巻が十六夜さんに襲い掛かる。
もしあそこに俺がいたならかなり慌てた事だろう。
しかし十六夜さんは特に慌てることも無く平然とした様子で時間を止めて避けようとする。
十六夜さんがまさに動こうとした時、チルノが叫んだ。
「引っかかったわね!!くらいなさい!!」
十六夜さんの前に突如竜巻が発生する。
それはちょうどそれぞれの竜巻を隙間を縫うように塞いだ。

つまりそれは逃げ場を失くすという事だ。
最初に作られて前にあった８個の竜巻は陽動だったのか。
中々考えないとできないことだ、敵ながら凄い奴だ。
もしかしたらあいつ本当は賢いんじゃないか？
「しまっ――――」
色々と考えていたら十六夜さんの姿が竜巻に隠されて見えなくなる。
そしてその後十六夜さんの悲鳴のようなものが聞こえた。
その悲鳴を聞いて俺は霊夢の二重結界から外に出て叫んだ。
「十六夜さん!!」
「はい、何でしょうか」
十六夜さんに呼びかけたと同時に後ろから十六夜さんが返事をする。
後ろを振り向いて彼女の姿を確認すると、若干ながら傷を負っていた。
服も所々破れていたのでかなり心配する。
「大丈夫か!?」
「はい、掠り傷ですのでご心配なく」
「咲夜～、まだ終わらないの？」
「只今終わりました、お嬢様」

「咲夜は相変わらず仕事が早いわね！」
「ありがたきお言葉です」
レミリアが褒めて十六夜さんが礼をしているやり取りを見て、終わったのか？と思う。
そしてチルノの方に視線を戻すと、そこには体にナイフが刺さっているチルノが倒れていた。
慌てて彼女の下に近づく。
「ナイフが刺さってる…!?」
ナイフが刺さっているチルノを驚きながら見つめる。
弾幕ごっこってこんなに危険なのか!?
慌てて霊夢に呼びかける。
「おい…これナイフが刺さっているけど……」
「あー…それは大丈夫よ。弾幕ごっこやっている奴らはナイフ刺されたぐらいじゃ死なないの」
そんな馬鹿な事があるわけないだろと言おうとした時、霊夢がチルノを叩く。
するとチルノがスッと起き上がった。
「痛ーい！なにすんのよ!!」

「勝負は終わったわ、あんたの負けよ」
「嘘だ嘘だ!!あたいはまだ負けてないもん!!!」
「ったく諦めが悪いわね…。とにかくあんたは負けたの」
ごねるチルノをあやす霊夢。
そんなチルノはふと俺の方を見て近寄ってくる。
「あたいはまだ負けてないよね？ね？」
どうやら他人の意見を求めてまでも勝負に勝ちたいらしい。
しかし…どう言ったらいいのか分からない。
十六夜さんはスペルカード使ってなかった感じに見えたし、そもそも弾幕ごっこを見るのが初めてだし。
迷った俺は取りあえず答えた。
「んー…多分負けたと思うぞ」
「そんな事ないもん！あたいは負けてないもん!!」
「でも十六夜さんの攻撃に負けただろ？」
「うー……」
未だに負けたという事を認められないチルノは涙目になってこちらを見る。
だけどこちらとしてもルールがよく分からないのでなんとも言えない。

暫くの沈黙の後、ついにチルノが泣き出した。
「ひっく……えぐ…あたいは…負けてないもん…」
泣き出したチルノに対して驚きながらも霊夢に助けを求めようとする。
だが霊夢は素っ気無い表情で、
「あら、泣かせちゃったわね」
「えぇ!?俺は何もしてないぞ!」
「でもチルノは泣いてるじゃない」
「それは…そうだけど」
「ならあんたが責任持ってあやしなさい、私はそんな面倒な事は嫌なのよ」
「そんな…」
「ファイト♪」
助け舟を出してくれる所か俺に面倒事を擦り付けてきた。
もう嫌だ…でもやるしかない。
レミリアと十六夜さんも見てるだろうし、今彼女達の心象を悪くするわけにはいかない。
それに泣かせたのは俺のせいでもある。
そう自分を納得させてチルノの方に向きなおす。

「えっと…何で勝負に負けたくないのかな？」
なるべく幼児をあやすような口調で話しかける。
するとチルノは服で涙を拭きながら答えてくれた。
「……大ちゃんを…助けたいから」
「大ちゃんっていうのは君の友達？」
「うん……」
友達助けたいから勝負に負けたくないって…意味がわからない。
もう少し聞いてみよう。
「どうして助けたいの？」
「だって…大ちゃんが、黒いのに襲われて…それで黒いのを使っている奴をたおせばたすけられるって…大ちゃんが…大ちゃんが……うわあああん！」
再び泣き出すチルノ。
俺は彼女の頭に手を置いて優しく撫でる。
「そっか…大変だったね。でも大丈夫、俺たちが君のお友達を助けるよ」
「……本当？」
「あぁ、約束する」
「じゃあ…指きりしてくれる？」

「いいよ」
　チルノは小指をこちらに出す。
　俺も小指で彼女の小指を握る。
　チルノの指はひんやりと冷たくて温かかった。
「ゆーびーきりげんまんー嘘ついたら針千本のーます、ゆびきった！」
「これで…大丈夫？」
「あぁ、大丈夫。絶対に助けてみせるさ」
　チルノとの指きりを終えてスッと立ち上がる。
　そして霊夢の方へと向く。
「やっぱりお前の言うとおり、これは異変ってやつかもな」
「最初からそう言ったでしょ？で、場所は何処なのチルノ？案内して」
「うんっ！」
　チルノが返事をすると同時に、話を聞いていたレミリアと十六夜さんが話に入ってくる。
「悪いけど、私達は一旦館に戻るわ。パチェの様子と咲夜の手当てが必要だしね」
「申し訳ありません、私が怪我を負ったばかりに……」
「別にいいわよそれくらい、ただ心配になっただけよ」

「分かった、手短に済ませてくる」
「気をつけなさいよ、貴方はただの人間だから。人間はとても脆いのよ、覚えておきなさい」
「あぁ、覚えておくよ」
「それじゃあ戻ってきなさいよ！」
　レミリアと十六夜さんがそう言って館に戻っていくのを見届けた後、俺は霊夢の方に向き直った。
「さぁ…チルノの友達を助けに行きますか」
「そうね…さっさと終わらせてゆっくりしたいわ」
「二人とも、あたいについてきて！あるいていくわ！大ちゃんの周りに行くと飛べなくなるから！」
　チルノが先導して歩く。
　そして俺と霊夢は彼女に付いて歩いていった。

第8話

紅魔館周辺にある小さな泉。
泉の水はとても透明でずっと見ていても飽きない程綺麗だ。
そんな小さな泉の中心に1人の少女が呟きながら静かに浮いていた。
「ワタシは貴方を愛してる…愛してる愛してる愛してるアイシテルアイシテ――――――アアアアア!!!・!!!」
少女は何かを呟いている途中で突然叫んだ。
彼女が暴れると、泉の水面に大きく白波が立つ。
すると先程までとても澄んでいた泉の水が黒に染まり異臭を放つヘドロの様になった。
「私はワタシ、でも私はワタシじゃない。どうすればイイノ？貴方とイッショにいるにはドウシタラ……あ」
ふと少女は泉の付近を通った燃える様な赤色の髪の少女を見かけた。
赤色の髪の少女は泉の水を見て驚く。
「この水は…一体何があったんだ？」

「ココは私たちのバショ…消えてよ」
浮いている少女が赤色の少女に近づいて話しかけるが気づかれない。
まるで少女が見えていない様な様子で白髪の少女は水をすくう。
「これは酷い……、ここの泉が汚れるのはもっと先なのに…慧音に知らせ――――うぐっ、こ、これは…」
「私はワタシ、どうして見てくれないの?ワタシが見えないの?……なら、シネ」
少女が腕を振ると白髪の少女にヘドロの様な水が纏わりつく。
それは彼女の首を絞め手を絞め足を絞める。
強烈な絞めに赤髪の少女は苦しみあがく。
「あああああ!!」
「抵抗?ソンナノ無駄なのに」
白髪の少女は状況が分からないが必死にあがく。
しかし、あがけばあがくほと絞める小さな力は強くなっていく。
やがて白髪の少女の手足が嫌な音を立ててプランとなる。
白髪の少女の手足が折れたのだ。
「ぐっ…誰…か……たす」
「サヨウナラ」

少女がそう言うと首の絞めが強くなる。
白髪の少女はもはや抵抗する力もなく――――生き絶えた。
それが分かると、白髪の少女は放り捨てられる。
そして少女は再び泉の中心に戻るとまた呟く。
「私は待ってるよ、ダッテ貴方がスキダモン。待ってるよ…チルノちゃん」
そう呟くと、少女はうずくまって静かに人を待った。

――――

「なあ、大ちゃんってどんな子なんだ？」
鬱蒼と茂る植物を避けながらチルノに聞く。
チルノに案内されてかれこれ２０分、その間が無言でかなりキツかったので話を適当に出したわけだ。
チルノはもう泣き止んで今では最初にあったドヤ顔でこちらを見る。
「大ちゃんはね！あたいの友達なの！ずっと一緒にいるからえっと…しんゆーってやつね！」
「そっか…親友、か」
俺には親友と呼べる奴はいるのかな…
霊夢達が外の世界と呼ぶ世界で、俺は友達はいたが親友と呼べる奴はいなかったと思

う。
　唯一それに近いと言えるのは、近所に住んでいる幼馴染だろうか。
「何考えてんの？」
　考え込んでいると、霊夢がぐいっと顔を近づける。
「いや、ちょっと友達について考えてた」
「ふーん、外の世界の友達？」
「そんなとこ。でも、チルノが言っているみたいに親友って呼べる奴はいるんだろうか…って思ってな」
　俺の言葉を聞くと、霊夢は腕を組んで考えながら答える。
「うーん…私の友達は殆ど変な奴よ。妖怪とか人とか、まあとにかく色々いるわよ」
「そうか…大変だな」
「でもね、不思議と嫌いじゃないのよ。こうやって異変があって、異変を解決して、宴会を開いて。それだけで楽しめるもの」
　照れながら微笑む霊夢。
　霊夢にとっては友達＝親友なんだろうなと何となく感じられた。
　俺にもこんな友達とかがいたらな…いやもういるか。
　霊夢、レミリア、パチュリーさん、十六夜さん、小悪魔さん、美鈴さん、チルノ。

彼女達がどう思っているかは知らないが、俺は彼女達とずっと友達でいたい。
「ほら、早く行くわよ！」
あぁ！すぐ行く！と霊夢に向かって答えようとした時、何処かで嗅いだような匂いがした。
この匂いは…一体……？
「どうしたのー？」
返事を返されなかった霊夢がこちらを振り向く。
俺は霊夢の呼びかけに気づき答える。
「いや、何でもない！あと、ちょっと悪いが先に行っててくれ！」
「何でなのよー！」
「少し確かめたい事がある！大丈夫、すぐ戻る！」
「なら気をつけなさいよ！」
「分かった」
そう言って先に行った霊夢とチルノ。
案外深く聞かれなかったな。
まったく…心配されてるのか心配する必要がないと思われてるのか分からない。
返事を返した後、俺は匂いのした方向に歩いて行く。

すぐ戻ると行ったので、少し早めに歩くと…匂いの原因が分かった。
「こ…これは……!?!」
あまりの光景に吐いてしまう。
何故なら、目の前には両手両足が変な方向に曲がっている白髪の女の子の死体が置いてあったからだ。
さっき嗅いだ匂いが嗅いだことのある匂いっだったのは、レミリアの槍から漂っていた血の匂いと同じだったからなのか。
暫くして一度深呼吸をする。
確かに日本じゃこんなリアル死体を見たことなんてないが、慣れるしか無い。
目の前にあるのは紛れも無く死体だ、言い換えればただの死体だ、そこまでビビる事はない。
「ふう…ふう…はぁ……」
段々と状況が整理でき始めた。
だがまさかの死体が俺が落ち着くのを待たないと言わんばかりに急に燃えた。
「熱っ!!」
火の粉がてにかかり急いで払いおとす。
火傷していたら後でパチュリーさんに治してもらおう。

そんな事を考えつつ、俺は目の前の光景に目を向ける。
死体が急に燃えたなんて信じられないが、これまでの事が信じられない事だらけだ。
そう言えば炎が一瞬鳥みたいな形をしていたな…
まさか何かの能力か？あくまで推測の話だが。
炎は依然少女の死体を燃やしている。
そしてあっという間に少女の死体は灰になった。
「…え？」
唖然と驚いた瞬間、消えたはずの炎が再び燃える。
そしてそれは人ほどの大きさにまで膨れ上がり、そして…
「ふぅ…何とか助かったな」
死んだはずの少女が屈伸運動をした。
何なんだ、何が一体どうなってるんだ？
ふと、白髪の少女と目が合う。
白髪の少女は恐る恐る聞いてくる。
「…ひょっとして、今の見てた？」
「…あぁ、見てた」
「そうか…悪いな、気持ちの悪いものを見せて」

「気持ち悪い？何が？」
　確かに死体を見て吐いたが、驚きの方が勝ってる。
　俺の言葉を聞いた白髪の少女は、驚いた様子でまた尋ねてくる。
「え!?本当にか!!?」
「あぁ…死体には驚いたけど」
「そ、そうか。私は藤原妹紅、よろしく」
「よ、よろしく…えっと、一つ聞いていいか？」
「何だ？」
「さっきの死体って…藤原さんの？」
　手短に済まそうと聞きたいことだけを聞く。
　チルノと霊夢が先に行っているから急がないといけないからだ。
　藤原さんは一度腕を組んで考えて、答えた。
「あぁ、そうだよ。私は不老不死だからね、あの程度じゃ死なないし死なないのさ」
　何処か儚げに答える藤原さん。
　その表情はまるで永遠の生に対する皮肉の様だ。
「そうか。で、何でこんな所にいるんだ？」
「ちょいと散歩しにね。…それじゃあ私は行くよ」

「あぁ…分かった」
「じゃあな、少年」
そう言うと、藤原さんは1人で奥へと走って行った。
それにしても…不思議な人だった。
死んで生き返るとか何あり得ないことを実現させてるんだよこの幻想郷は。
それに散歩で死ぬってどんな散歩だよ！これが1番驚いたわ!!
「…そうだ、霊夢の所に戻らないと」
冷静になり、元来た道を引き返す。
戻った先には誰もいなかったが、書き置きされてる白い紙が植物の葉の上に置かれていた。
『戻って来ないようだから先に行っとくわ。チルノによると今歩いている道をずっと真っ直ぐに歩くと着くらしいから、早く合流しなさい。ＰＳ…念のためにスペルカードを一枚置いておくわ、あんたでも使える様にしてあるから護身用に持っときなさい』
白い紙の裏を見ると、そこにスペルカードが置いてあった。
それを手に取り、見る。
「『夢想天生』？何だこれ」
どう見ても必殺技にしか見えなさそうなスペルカードだ。

でも取り敢えず貰っておこう。
そう思いスペルカードを胸ポケットに入れる。
このスペルカードにどんな使い道があるのか分からないが、持っておくに越したことはないだろう。
「よし…行くか」
そう言って俺は2人を追って走り始めた。

「やっちゃった……」
「どうしたんだー？」
「何でもないわー」
自分のミスに気づいてしまった。
あの時、太一の戻りが遅いから書き置きとスペカを置いたのは良かったけど……
「まさか『夢想天生』の方を置いて来ちゃうなんて…」
本当は二重結界の方を置いておくつもりだったのに、チルノが急かしたから間違えてしまった。
しかもあれは私の切り札と言ってもいいスペカなのに……
「はぁ…仕方ない。何とかなるでしょ」

間違えた物は仕方ない、幸いにもあれは私以外誰も使えないから暴発する心配もないし後で返してもらおう。

そう思って、私はチルノの後をついて行った。

第９話

死ぬたびに炎に焼かれて復活する藤原さんに出会い、霊夢に護身用のスペルカード【夢想天生】を貰った俺は今霊夢達が歩いて出来た道を歩いている。

そんな俺は歩きながら、色々と呟く。

「はぁ…それにしても、まるでファンタジーの世界に入ってきたみたいだな……」

魔法、時間停止、不死身、どれも今まで無いと信じていたものだ。

そんな物アニメの中か小説だけの話かと思っていたのに俺は見てしまった。

それもとても手品とは言えないレベルの物ばかりだ、納得せざるを得ない。

おまけに言うと、俺にも何か力があるみたいだし。

人の攻撃を消せるわ、やけに体は軽いわで俺にも超能力とかいう分類の力があるのを認めざるを得ない。

これらは何故使えるようになったのか、はたまた元々俺が持っていた物だったのか……考えれば考えるほどわからなくなる。

暫く考え、その答えが曖昧なものばかりに気づいた俺は首を振る。

「考えても仕方がないな…。よし、今は目先の事に集中しよう」

今の俺にはやらなければいけないことがある。
それは狂気に染められたチルノの友達の大ちゃんを元に戻すという約束だ。
チルノから話を聞く限り、黒い何かが大ちゃんに纏わり付き自分を犠牲にチルノを逃したらしい。
チルノにとって大ちゃんは親友と言っているから、一刻も早く助けてあげたい。
そう思いつつ、俺は懐に入れている3枚の素のスペルカードを取り出す。
これは霊夢から餞別に貰った物だが…使い方が未だに分からないのだ。
「まさに宝の持ち腐れってやつか…」
まじまじとスペルカードを見つめるが何も出てこない。
そもそもこれはどういう過程でスペルカードになるのかが分からないまま貰ったので、ただの白いカードなのだ。
「…ま、いつか使えるだろ」
そう呟いて懐に仕舞う。
その時、離れた所からバカでかい音が響いた。
その音に一瞬だけ怯むがすぐに落ち着いて状況を確認する。
「この先は確か…霊夢の所か!!」
霊夢とチルノに何か異変が起きたのだろうか。

この先にいるのは間違いない。
そう思うとすぐに音が起きた方に向かって走り出した。

「こいつは厄介ね…」
チルノに案内されて着いた先は小さな泉。
そこの水が物凄く汚かったから早く大妖精を探そうとしたらまさか誰かが不意打ちをかけてくるなんて……
しかも私でさえ感知しにくいし視認もしにくいなんて…ここら辺の妖怪ってこんなに強かったかしら？
霊夢は懐からスペルカードではなくお札を取り出す。
そしてそのお札を僅かに視認出来ているソレに向かって投げた。
投げられたお札は、大妖精に当たる数センチ前で爆発して煙を出す。
そしてその隙に一時撤退をしようと霊夢は駆け出す。
しかしチルノが動かないので、霊夢は叫んで呼びかける。
「分が悪いわ…チルノ！一旦退くわよ!!」
「……」
「チルノ!!」

チルノが動かない、どうしたって言うのよ……
取り敢えずチルノを無理矢理にでも連れて行かないと危ないわね。
霊夢は渋々ながらチルノの元へと駆け寄りチルノを引っ張る。
だが霊夢に対抗するかのようにチルノは踏ん張った。
「ちょっとチルノ!!ふざけてないで早く行くわよ!!」
「……」
一歩も動かないチルノに痺れを切らしたのか、霊夢は引っ張るのをやめてチルノを抱えて連れて行こうとする。
しかし抱えようとしてチルノの顔を見た時、霊夢はぎょっと驚いた。
「……!?」
目に光が宿っていない…!?
さっきまであんなに元気そうだったのに。
まさかあいつの仕業…?
そう考えて霊夢はソレの方を見る。
ソレは霊夢を全く見ていないが、突如喜びの叫びをあげた。
「チルノちゃん!!!ワタシ会いたかったよ!!!ズットズットズットズットズット待ってタンだよ!!!これで一緒にイラレルね、ずーっと、ズーット先の…未来まで!!」

「……あう」
ソレは喜びながらチルノの方へと近づく。
このままではマズイと思った霊夢は懐からスペルカードを取り出す。
そして近づくソレに立ちはだかる様にチルノの前に立つ。
「いい加減にしなさい。あんたは誰よ!!」
霊夢はソレに問いかける。
ソレは霊夢に視線をやり、ぶつぶつと喋る。
「アナタハ誰??チルノちゃんのトモダチ???ソレとも…ワタシ達のジャマをする人??……ワカラナイ、ワカラナイヨ」
徐々に不安定になっていくソレの言葉。
仕掛けるなら今しかない、そう思った霊夢はスペルカードを掲げる。
「【霊符：ミニ夢想封印】!!!」
霊夢の頭上に陰と陽のすいか程の大きさの陰陽玉が大きな音を立てながら２個出現する。
「くらいなさい!!」
陰陽玉は霊夢の掛け声でソレの方へと発射される。
しかしソレは避けもせずに陰陽玉に突っ込んで行った。

陰陽玉がソレに当たる、するとソレは叫びながら空中でもがく。
「痛いイタイタイいいいい!!!!なんでコンナコトするの????」
「決まってるじゃない、さっきのお返しよ!!」
「オカ……えし…。なら…私もオカエシ」
ソレは霊夢に向かって手を伸ばすと手の先に泉の水を収縮させる。
ヘドロのような泉の水は霊夢の陰陽玉と同じ程の大きさになり発射される。
「私はワルくないもん…あなたが、わるい!!!!」
「はあ……全くめんどくさいわね【霊符：二重結界】」
霊夢は水色のバリアを展開して水球を防ごうとする。
しかし水がバリアに触れた途端にバリアがジュウと音を立てて溶け始めた。
驚きながら咄嗟の行動でチルノを後ろに蹴飛ばして自分も二重結界から出る霊夢。
彼女の勘と本能がそこにいてはいけないと悟ったからだ。
「っ!!」
霊夢は自分がいた場所に目を向ける。
そこには自分が展開した二重結界が黒い水によって覆われて溶かされていた。
「一体何なのよ…私の二重結界があんな簡単に壊されるなんて」
「ふふふ…私はわたし、ソレ以上でもソレ以下でもなイ!!!さあチルノちゃん…行きマ

ショウ？」
ソレがクイッとチルノに向かって手を招く。
普通の状況ならチルノはついて行かないはずだが、彼女は今正気ではない。
霊夢はソレの狙いに気づいてチルノの下へと近寄ろうとする。
しかし霊夢の邪魔をするかのようにうねうねと泉の水が霊夢の道を塞ぐ。
「邪魔よ！」
霊夢は札を投げつけて爆発させ、爆風で道をこじ開ける。
そこにはチルノを抱きしめているソレの姿があった。
「サア……イッショニ…行きマしょう………？」
「……ぁあ……あああああああああああぁぁぁぁ!!!!!!???あたいは何してっ、あたいは、あたいはあたいはあたいはあたいはぁぁぁぁぁあああああ!!!!!!!!!!!!」
発狂するチルノ、ソレはニヤリと気持ちの悪い程までに口角を上げる。
このままじゃまずい…そう思った霊夢は懐から札ではなく何か書かれている針を取り出す。
「これは使いたくなかったんだけど仕方ないわっ!!【封針（ふうしん）：幻想滅（げんそうめつ）】」
幻想滅……先代の博麗の巫女が編み出したこの世界から生み出た幻想を滅する特殊な経が書かれた針。

これを使えば幻想郷で生まれた存在を塵にする事ができる。
正直なんでこれを使おうとするのかは分からない、けどこれを使わないと何か拙い事になる予感がした。
でも本当に使っていい物なの？狂っているあの黒い奴を殺すことになるのよ…？しかも殺すではなく完全な消滅、私にそんなことができるの？
躊躇している様子の霊夢、だが発狂しているチルノを見て決意を固める。
そして未だにチルノを抱き続けているソレに幻想滅を投げようとする。
しかしそのタイミングを狙っていたかのように背後から水が出て霊夢にまとわりついた。
「しまっ———」
言葉を発しきる前に水は霊夢の周りを覆い水の中に閉じ込めた。
ソレはニヤリと口角を吊り上げて霊夢の方を見る。
「フふふ……さようなラ、お姉サん。さぁ…チルノちゃん、私と一緒になりまショウ？」
「あああぁ……あたいの中に…汚イモノ……が……」
黒い何かがチルノの体に少しずつ纏わりついていく。
その度にチルノは苦しそうな声を上げて助けを求める。
しかし誰も来ない、霊夢は必死に出ようと懐のスペルカードを取ろうとするが水の中

では激しい水流が巻き起こっていて霊夢は動く事すらままならない。
時間が経ちチルノに纏わりつく黒い何かがチルノの首まで侵食する。
もう叫ぶ力も残っていないチルノはピクピクと僅かに体を動かす事しかできない。
もう駄目だって言うの…？
博麗の巫女の私がいながら…無残にもチルノを洗脳されちゃうわけ……？
絶望的な状況の中で霊夢は息苦しそうに空気を吐き出してしまう。
霊夢もまた危機的状況下にあるのだが彼女はそれでも水流に抗うようにもがく。
苦しい…息が、もう……
いよいよ限界になってきた霊夢とチルノをみてソレは笑う。
「アト少しだよチルノちゃん…あとすこ――――」
「【不死：火の鳥―鳳翼天翔】!!」
ソレが勝ちを確信したその時、ソレ目掛けて不死鳥の形をした炎が襲い掛かってきた。
「!!???」
不死鳥の形をした炎はソレにぶつかり、ソレの身を焼く。
身を焼かれる痛みにより、ソレは一時水のコントロールを失いチルノから離れる。
ソレが離れた事によりチルノにまとわりつく黒い何かの侵食は止まり霊夢を閉じ込

めていた水の球が形を維持できなくなり流れる。
「ゲホッ……ゴホっ…今のは…まさか」
「よぉ、博麗の巫女。大丈夫か？」
男勝りな口調で霊夢の目の前に白髪の少女が現れる。
その少女の姿をみて霊夢は驚きながら彼女に立たされる。
そして息を整えて返事をする。
「…大丈夫よ。助かったわ」
「そうか、なら良かった」
「ところで何であんたがここに？」
「あいつに少し借りがあってね、それを返しに来ただけさ」
「奇遇ね、私もあいつに今借りを返そうと思ってたのよ」
ソレが身を焼く炎を水で消す。
先ほどまで笑っていたソレの顔が激昂のあまり歪んだ。
「さっきの人…？何で…ナンデ私のジャマヲするの……!!!!!それに…なんで生きてイルの!!!!」
「生憎私は死んでも死ねなくてね、生き返ったのさ」
「…うう……ウウううう!!!!!死ね死ね死ね死ねシネシネしね、シネええええええええ!!!!!」

叫ぶ…というよりは獣の咆哮に近い雄叫びをあげるソレ。
ソレは周りに黒い球をいくつも生成する。
「あれに触れない方がいいわよ。どういうわけかあの球私の結界を溶かせるみたいだし」
「そうか、助かる」
「別にいいわよ。さ、始めましょうか。行くわよ、藤原妹紅」
「あぁ、第二ラウンドの開始だ！」
白髪の少女、藤原妹紅と霊夢は気を引き締めてスペルカードを取り出した。

第１０話

霊夢と妹紅はソレを挟むような形で走って接近する。
二人とも本当は空を飛んで弾幕を打ち込むつもりだったが、チルノが身動きできないのと、空を飛ぶには障害物が多かったので地上戦闘になる。
霊夢は右、妹紅は左から挟み撃ちにしようと回り込んだ。
しかし、
「コナイデ、近づかないでっ【汚染：戯れる穢れ】」
ソレがスペルカードらしき黒いカードを持って呟く。
すると泉の水がソレの周辺に球の形を成して浮遊する、その数およそ１００個。
霊夢はソレがスペルカードを使える事に驚いたが、すぐに目の前に集中する。
「面倒だからすぐに終わらさせてもらうわ！【霊符：夢想封印】!!」
霊夢もスペルカードを掲げて発動させる。
彼女が先ほど使ったミニ夢想封印の３倍の大きさの陰陽玉が霊夢の左右に生成された。
しかも陰陽玉の周りは白いオーラのような物がバチバチと音を立てている。

「妹紅!!離れなさい!!」
「聞けないね!!こいつには借りがあるんだ！【蓬莱「凱風快晴―フジヤマ―――」
妹紅がスペルカードをズボンのポケットから取り出す。
そして霊夢と同じくソレに向かってスペルを宣言しようとしたところで背後から迫り来る【汚染：戯れる穢れ】に捕まった。
ズッポリと水球に全身が入ってしまった妹紅はじゅうじゅうと体を溶かされてしまう。
「酸!?」
霊夢は驚いて妹紅を心配するが目の前にいるソレが霊夢に向かって追撃を仕掛ける。
寸前の所で妹紅から注意を水球を向けて紙一重で避ける。
そしてお返しにとばかりに霊夢は右の陰陽玉を投げつける。
陰陽玉は物凄い速度で加速してソレに当たる。
ソレは陰陽玉の進む方向に吹き飛ばされて水面をバウンドして地面に吹き飛ばされた。
ソレが離れた事により霊夢は妹紅の方を見る。
「あんた大丈夫?」

「――――!!」

妹紅は酸性の球体に手と足をドロドロに溶かされており、見るのもためらわれるレベルの状態になっていた。

普通に考えて死んでいると思うのが当たり前の妹紅を見ながら霊夢は何故か少し離れてため息を吐いた。

「はぁ…【二重結界】」

ためいきを吐きながらも自分の周りに二重結界を展開した霊夢。

そしてそれを見たのか、死んでいるはずの妹紅が突如赤く光り――――自爆した。

爆発は妹紅を覆っていた水球を見事に当たりに散らし飛ばす。

散らばって飛んだ水球は少し離れた霊夢の二重結界にも少しかかり結界を若干溶かした。

「妹紅…あんたすぐにやられてんじゃないわよ。あとここで炎系のスペル使うの止めなさい」

霊夢の話しかけた妹紅は…なんと傷一つない体で歩いていた。

妹紅は何気ない様子で霊夢に平謝りする。

「悪い悪い、不意を突かれたんだ。あと私のスペルは殆ど炎系なんだが?」

「そう、じゃあそこで見てなさい。あたしはあんたの巻き添えになりたくないのよ」

「断る、私はあいつに借りがあるって言っただろう？」
「うるさいわね、とにかく黙ってみてなさい！あとっ!!」
　霊夢が妹紅を強引に説得して再び先頭に戻る前に、霊夢は一度妹紅の方へふり返る。
「服を着なさい！あんたリザレクションしても服は燃えない様にしてるんでしょ？」
　と、霊夢は妹紅を注意した。
　何故かというと、言うまでも無く妹紅が一糸纏わぬ裸であるからだ。
　妹紅は自分の姿を確認しながら若干乾いた笑いで答える。
「いやぁ…それがな……さっきの酸の球体に服を溶かされたんだよ。あと自爆したときとかも同様に服は破れる、だから私はリザレクションするときは基本的に燃えているんだよ…」
「なんとかならないの？」
「一応近くに私の仮拠点の一つの小屋がある。そこに行けば服の替えがおいてあるな」
「じゃあ取りに行きなさいよ」
「嫌だ、私はこいつに借りを返すんだ！」
「ふーん、じゃあ誰かにあんたの裸を見られてもいいってわけね？」
「ふっ…そんなの何度もあったし慣れたさ……」
　若干自暴自棄になって答える妹紅に若干引く霊夢。

「そ、そうなの…じゃあ分かったわ。私が上に叩き上げるからそこにスペルを打ち込みなさい」
「…ありがとな、博麗の巫女」
「霊夢でいいわよ」
「そうか…じゃあ霊夢、よろしく頼む」
「言われなくてもやってやるわよ」
妹紅との会話を交わし終えて、ソレとの戦闘に気持ちを切り替える霊夢。
そしてソレが霊夢たちの前に戻ったところで霊夢はソレに向かって走り出す。
「くそ…クソ…クソ……なんで…わたしのワタシノ…邪魔ヲおぉぉ!!!!」
ソレが怒り狂い、先ほどとは比べ物にならないほどの数の水球を出す。
それを見て霊夢がめんどくさそうに答える。
「何で邪魔をするのかって?そんなの決まってるじゃない。あんたが危険だからでしょうが!!!」
「うるさいウルサイウルサイウルサイイイィィィィ!!!!!!【狂気：踊り狂う傀儡人形】!!!!」
ソレがそうスペルを宣言すると、今まで微動だにしなかったチルノが霊夢の方に向いて氷の礫を飛ばしてきた。
「チルノっ!!冗談はやめなさい!!」

チルノに叫ぶ霊夢だが、礫を飛ばしているチルノの目に光が宿っていない事が分かると叫ぶだけ分だと判断する。
「性質(たち)が悪いわね!!」
愚痴を溢しつつ飛んでくる氷の礫と水球を走って避ける霊夢。
しかし次第に霊夢が疲れ始めて、攻撃が次第に掠り始める。
「やっぱり空を飛べないのは痛いわね…」
「もろいモロイ！あなたってこんなにもモロカッタのね!!」
「はぁ…仕方が無いし、本気でも出そうかしら」
霊夢は一度後ろに下がり、攻撃の範囲外に出る。
そして懐から３０枚程お札を取り出す。
「これ使うと疲れるのよね…あと眩しいし」
だるそうな様子で霊夢は呟くと持っているお札を宙に放る。
一見霊夢がお札を捨てたように見えるが、お札はなんと地に落ちずに宙を浮いていた。
浮いているお札は一枚一枚が強烈な光を発している。
お札の強烈な光はソレの視界を一時的に暗くさせる。
「アアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

「あら、目がああぁ目がああぁとか言わないのね」
そう言うと霊夢はさらに追加でお札を放る。
その数、およそ２０枚。先ほど浮かせた３０枚のお札と合わせると、その数５０枚程になる。
「それじゃあ妹紅、追撃よろしくね。【神霊：夢想封印・極(きょく)】」
霊夢がスペルを宣言する。
すると浮いていたお札が陰陽玉に変わった。
しかも霊夢が先ほど放った夢想封印の陰陽玉の２倍は大きい。
「死なない程度の本気だから大丈夫よ…多分ねっ！」
そうソレに言い放つと、霊夢は陰陽玉をソレに向かって撃った。
陰陽玉が放たれる直前に視力が戻ったそれは叫びながら陰陽玉を避けて行く。
「ガアアああああああああァぁぁ!!!」
ソレは霊夢に向かって陰陽玉を避けながら突進する。
一方の霊夢は…避ける気もないのか欠伸している。
その事がソレの怒りの火に油を注いだ。
「シネエエえええェェェェ!!!」
そしてソレの突進が霊夢に当たろうとして――――ソレは空高く飛んだ。

理由は水面下から飛び出た陰陽玉に気づくのが遅れて当たってしまったからである。
しかし威力が若干抑えられているのか、上に飛ばされたソレは先ほどと比べ少し遅い速度で上っていく。
「妹紅！」
「分かってるさ!!」
霊夢が妹紅の名前を呼ぶと、妹紅は待ってましたとばかりに空高く飛ぶ。
その速度は叩き上げられているソレより速く、あっという間に追い越してしまった。
「上ってもらったところ悪いが……落ちろ！【蓬莱・凱風快晴　―フジヤマヴォルケイノ―】!!!!!」
妹紅がスペルを宣言すると彼女の頭上に巨大な不死鳥型の炎が現れる。
それはまるで輝く夕日の様で見た者はその美しさに魅力されそうなほど綺麗だ。
そして燃え盛る不死鳥の炎はソレへと向かいぶつかる。
「ああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
自分の体が尋常じゃない熱さの炎に焼かれているソレは叫ぶしかできない。
そして不死鳥の炎はソレを巻き込みつつ地面へと落ちていく。
そのまま不死鳥の炎は泉に落ちて消え、水面にはソレが浮かびあがった。

「ふぅ…なんとか倒せな」
一安心した妹紅は自分が裸の状態だと思い出して、急いで地上に降りる。
地上では霊夢が泉の周りに水色に輝くお札を貼っていた。
「何をしているんだ？」
「浄化のお札を貼ってるのよ。この泉ごとあいつを浄化しようと思っているんだけど…やっぱり無理ね」
「そっか…で、結局あいつは何だったんだ？」
「異変よ異変、他の奴を急に狂ったりさせる黒いドロドロなのが元凶なんだけど…どうにも数が多いのよね。あんたも気をつけなさいよ」
「分かった、気をつけるよ」
「あとあんた、さっさと服を取りに行きなさい」
「分かってるよ!!じゃあまた後で会お――――」
服が置いてある小屋へ妹紅が行こうとして振り向いた瞬間――――妹紅はカメラを持った女性と目が合う。
いきなり現れて驚いているのか、妹紅は固まっている。
「あややっ、これは大スクープですよっ!!」
「……」

固まっている妹紅に対して霊夢が肩を優しく叩いた。
「…お疲れ様」
「……」ドサッ
そして妹紅は霊夢の一言で倒れた、主に羞恥心で。
そんな事をおかまいなしにカメラを持った女性は妹紅を撮っていく。
「これはいい記事になりそうですねぇ…！見出しは何にしましょうか？『号外・博麗の巫女と蓬莱人が実はデキていた!!』とかでもいいですね…ぐふふ」
「おいこら、何勝手に私まで巻き込んでくれてんのよ」
「あっ、霊夢さん。さっきの戦い疲れましたか!?」
「えぇ…それよりも文。あんたに一つ言いたいわ」
霊夢は笑顔で文と呼ばれた女性に手を回して肩を組むと。
「もし今の事記事にしたら、天狗を滅ぼすわよ？」
「調子に乗りすぎましたすみません！」
霊夢に肩を組まれた状態から高速で土下座モードに移行する文。
そして文は何か用事を思い出したみたいに慌てる。
「あっ、そう言えばー。今日ははたてのオミマイニイクンダッタナー…」
「……私の言いたい事分かった？」

「はい分かりました、それでは私は失礼させてもらいまっすー!!!」
文はそう言って空を飛んでどこかに行ってしまった。
「全く…ほんとに迷惑だわ」
ため息を吐いた霊夢は地面に座る。
そして隣で倒れている妹紅を起こそうとする。
「ほら、妹紅。文なら脅しといたから大丈夫よー」
「……」
しかし霊夢の呼びかけに答えずにただ顔を真っ赤にしている妹紅。
これは仕方ないと思った霊夢は諦めて寝転んだ。
「ふぁ…寝ようかしら」
そう呟いた霊夢は隣に全裸の妹紅がいるにも関わらず、眠ってしまった。
そして霊夢が寝付いた直後に和希が来たのは後の話である。

第１１話

戦いが終わり霊夢たちが休憩して5分が経った頃、ようやく着いた和希は驚愕していた。

「あああああああっぁあああ恥ずかしいいいいいいいい!!!!!!」

「ぐへへへ…もっとお賽銭を…お賽銭…金……」

何故なら和希の目の前ではストレートな欲望の寝言をつぶやいて寝ている霊夢とその隣でうずくまって恥ずかしいと絶叫している藤原さんがいたからだ。

普通なら見かけない光景に和希は少しの間黙ると、

「……そうだ、チルノはどこだろう」

目の前の二人を無視してその場にいないチルノを探し始めた。

あまりにも唐突過ぎる出来事を和希は理解し切れなかったからだ。

つまりは現実逃避に近いものである。

「チルノチルノ…あ、いた」

程なくして、倒れているチルノを見つけた。

こっちも特に異常なくスヤスヤと寝息を立てて眠っている。

「おいチルノ、起きてくれ」
「ん……んんぅ…はっ！」
チルノの肩を揺らしながら声をかけるとあっさり起きてくれた。
後ろの方の2人は……後でいいか。
「大丈夫かチルノ？一体何があったんだ？」
「ええっと……なんか急に黒いのがぶあーって来たと思ったらあたいの方に来てね、そこから何も覚えてない！」
「……」
駄目だ、何行ってるのか全く分からん。
仕方がない…こうなったら霊夢から事情を聞くか。
チルノと一緒に霊夢の所に行く。
霊夢は気持ちよさそうに寝ていたため若干起こしにくかったが、肩を揺さぶり声をかける。
「おーい、起きろーー」
「お金があればなんでもでき…る……1…2…3…だぁ」
「いやどんな夢見てんだよ」
肩を強く揺さぶる、しかし起きない。

両頬を引っ張ってみる、しかし起きない。
耳元で大声を出す、やっぱり起きない。
「どうすればいいんだよ……」
まさにお手上げ。
あっさりと起きてくれたチルノと大違いだ。
さて…どうしようか、チルノからの情報は理解しにくいし、となるとやっぱり霊夢しか…
一瞬、霊夢の隣でうずくまっている裸の人を見るが、何か触れてはいけないような空気だったので目を逸らす。
それにしても、この人何処かで……ま、いっか。
先に霊夢を起こそう。
「でもどうすれば起きるんだ…？」
「あたい霊夢の起こし方知ってるよ!!」
そう言ってチルノは霊夢の耳下に顔を近づける。
多分大声でも出して起こそうとする考えなのだろうがそれはさっき俺がやった。
それとも俺より大きな声でも出せるのか…？
「あーっ、あんな所にお金が落ちてる！」

「お金!!?何処何処っっ!!!??」
チルノが霊夢にそう叫ぶと、霊夢は見たこと無い速さで起き上がりキョロキョロと周りを見渡す。
まるで最初から起きていたかの様な反応の速さだ。
その光景に呆気にとられて俺は呆然とする。
あんなに起こそうとしても起きなかったのに……
「ほらっ！あたいってばさいきょーね!!」
「あれっ!!?お金は!!!?」
慌てる霊夢。
もはやバカの子にしか見えない……
「そんな物ない！」
そして何故かドヤ顔で返すチルノ。
バカの子は一人だけじゃなかったよ……
「ちーるーのー……」ゴゴゴゴ
「うぎゃあああ!!」
チルノに騙された霊夢がキレてチルノを捕まえた。
そして次の瞬間霊夢はチルノの頭を両腕でグリグリした。

うわー物凄く痛そう（他人事）……
霊夢とチルノのやり取りを生暖かい目で見守りつつ、俺は二人を放置してうずくまっている藤原さんに声をかける。
流石にこれ以上裸で放置するのはキツイものがある。見る側にも見られる側にも。
そしてうずくまっている人の肩にそっと手を置いて優しく声をかける。
勿論目は瞑っている。流石にこの距離で見たりしたら殺されそうだし。
「あのー…」
「……」
「すみませーん…」
「……」
「もしもーし？」
「……」
「俺目瞑ってるんで大丈夫ですよ」
「…本当に？」
「うん、本当」
「……ありがとう」
藤原さんの感謝の言葉が聞こえたかと思うと走る音が聞こえる。

そして暫くするともういいぞと藤原さんの声が聞こえたので目を開ける。
そこには先程出会った服装の藤原さんがいた。
その顔は若干赤くなっていてとても可愛らしい。
「その…さっきぶり……だな」
「そうですね」
「えっと…何で裸だったとかは聞かないのか？」
「いえ、粗方予想は出来ますので」
霊夢がいた事と先程聞こえた爆発音からするに恐らく藤原さんは戦っていたのだろう。
誰と戦っていたのかは知らないけど多分その時の攻防により服を破壊されてしまったのだろう。
…多分。
「そ、そうか…こちらとしても聞かれないのは助かる」
「そうですか」
「一つ聞いてもいいか？」
「答えられる範囲ならいいですよ」
「その……私の裸…見たか？」

もじもじしながらも頑張って言い切る藤原さん。
さっき会ったときはクールなイメージだったから凄いギャップだな。
「えっと…その……遠くから少しだけ」
「……!!!!」
俺が答えると顔を真っ赤にして下を俯く藤原さん。
だって仕方ないじゃん、目に入ってきたんだから。
あれは不可抗力だ、そう不可抗力。
「……エッチ」
「ぐはぁっ!!」
鉄のハンマーで殴られたような衝撃を受けその場に突っ伏してしまう。
だって仕方ないじゃん！女子の裸なんて滅多に見れないし！それに大事な部分は見てないからセーフだろ!?!!
「す…すんませんした……」
「そ、そうだな。別に悪気があったわけじゃない…もんな。じゃあ私は行くよ」
「行くって何処に？」
「人里の寺子屋と永遠亭さ。そこで私の友人に調べて貰うよ」
「えっ、人里!?そんなのあるのか!?」

人里とかあったのか!?
えぇー…何で俺はスタート地点が紅魔館なんだよ…
俺を紅魔館≪あそこ≫に連れてきた奴を思い切り殴り飛ばしたい……
そう考えていると、ふと藤原さんがジロジロと見つめていることに気づく。え、何？何か変な格好でもしているの俺？
「しかし人里を知らないといい、その不思議な格好といいもしかしてあんた…外来人か？」
「……あ、あぁそうだって霊夢に聞いた」
びっくりした…外来人なのかどうか思われていただけか。
最初から知っていたと思っていたんだけどなあ…言わないとわからないのか？
まぁとにかく別に変な目で見られていたって訳じゃなかったからいいか。
「そうか…お前も大変だな。何で霊夢に戻させてもらえないんだ？もしかして……惚れられた？」
「いや別にそんなんじゃ『断じてないわ！』…だってさ」
否定している最中にきっぱりと否定する霊夢。
でも流石にそこまではっきり言われると若干傷つくな…
だって霊夢さん可愛いしというか今まで会ってきた人全員が可愛い。それに前々か

ら思っていたけど何だこの美少女率の高さは。
「そ…そうか。なら…わ…」
「え?今何て?」
「なっ、何でもない!何でもないぞ!」
茹蛸のように顔を真っ赤にして首を横にブンブン振る藤原さん。
それにしてもさっき何て言ったんだろう……『わ』しか聞こえなかったけど。
……分からない事を気にしても時間の無駄だな。
「それじゃあ俺たちは一旦紅魔館に戻るよ。ここで何があったのか霊夢とチルノに聞かないといけないから」
「私も一応当事者なのだが…話を聞かなくていいのか?」
「大丈夫です…多分。まぁもし困ったら人里に行くよ」
「そうか、分かった」
一度帰るために、チルノをグリグリしている霊夢を止めに行く。
まだやり足りないと言う霊夢を何とか説得して若干涙目になっているチルノをあやすのは中々骨が折れる事だった。というか涙目になるくらいグリグリするって少しやりすぎだと思う。
泣きかけのチルノの頭を優しく撫でながら帰ろうとすると、藤原さんが声をかけてき

た。

「最近、ここら一帯の妖怪達が凶暴化しているから気をつけろよ!!えーっと……」

「和希、上井和希だ!」

「そうか!じゃあまたな和希!!」

「あぁ、またな!」

そして藤原さんと別れて来た道を引き返す。

途中でチルノがおんぶして欲しいと言ってきたのでおんぶしてあげたらそのまま寝てしまった。

それを見た霊夢が私もしろと言ってきたが霊夢の方が大人なので断った。

それにしても妖怪が凶暴化している…か。

狂ったレミリアみたいな奴がうじゃうじゃいるのかな……いやでもあんなに強いのばっかりいるはずもないし……

よし、とりあえず今は気をつけるぐらいにしておこう。考え出したらキリがないしな。

だけど…本当に信じられない事ばかり起こるな…幻想郷って。

そう思いながらしばらく歩くと俺達は紅魔館に着いたのだった。

そうだたまには世界線を越えてみよう
第??話　世界を紡ぐ今日この頃

「……ここは？」
暗い空間の中で目覚める。
どういうことだ、確か俺はレミリアを助けて、パチュリーさんと小悪魔さんに治療するって言われて、睡眠薬みたいな物を飲まされて……
今までしてきた事を思い出す。
すると今の状況がなんとなく把握できた。
「睡眠薬を飲まされたって事は…夢か」
意識ははっきりあるから多分明晰夢ってやつだろう。
そんなもの無いと思っていたのに体験するなんて思ってもみなかった。
暗い空間を一度見渡す、周りには何も無い。
いや何かあるのかもしれないが、暗くて見えない。
体の感覚は何となくある、夢なのに凄いな。
「それにしても…暇だな」

いくら明晰夢でも何もない空間にいる夢なんて見ても仕方がない。
いつまでこの夢が続くんだろう、そんな事を思っていると首根っこを急に引っ張られるような感覚を感じた。
「っ――――!?」
首が急に絞まり徐々に息苦しくなっていく。
必死に体を動かすが、引っ張られる感覚は消えない。
そしてその状態のままでいると視界が暗くなっていく。
これ死んじゃうやつ？あ、でも夢の中だから死なないか。
でも夢の中で意識を失うのは変な感覚だ。
そう思うと同時に、目の前は真っ暗になり意識を失った。

――――――――

「お…い……！おい…だ…いじょ…か…．!!?」
誰かに呼びかけられる。
まさか神様が俺を転生させてくれるパターンか!?と思いゆっくりと目を開ける。
目の前にはなんと――――知らない少年がいた。
誰だよお前、神様の場合美少女か爺が相場だろうが。

内心、やや落胆しながら目の前の少年に返事を返す。
「あぁ…大丈夫そうだ」
ゆっくりと立ち上がる、さっきまであんなにボロボロだったのにまるで何もなかったかのような感覚だ。
パチュリーさんの治療が終わったのか？
そう考えて俺は目の前の少年に尋ねる。
「なあ…紅魔館って、知ってるか？」
「あぁ知ってるけど…用事でもあるのか？」
「ちょっとした用事があるんだ、案内してく…」
途中まで言い切った所で、俺は地面に倒れる。凄い痛い。
目の前にいた少年は突然倒れた俺に驚く。
「大丈夫か!?」
「大丈夫なはずだ……でも…」
そこまで言って少し沈黙の空間が生まれる。
そしてその沈黙は俺の腹の音によってかき消された。
「腹減った…」
その言葉を聞いて、ガクッとこける少年。

そしてため息をついて立つ。
「何じゃそりゃ……」
「ははは…」
「今から霊夢の所で朝飯食おうと思ってるけど、良かったら付いてくるか？」
霊夢という人物は知らないが、もしかしたら朝食を貰えるかもしれない。
というか、何こんなに腹減ってるんだよ。
さっきまで空腹なんて感じなかったのに。
そう思いながらもゆっくりと立ち上がり返事をする。
「あぁ、是非付いて行かせてもらう」
「そうか、俺は湘南。坂上湘南だ、よろしく」
「上井和希だ、よろしく頼む」
お互いに軽く自己紹介を済ませる。
そして坂上は行くぞと言い、歩く。
それに付いて行く俺はそこから空腹との戦いに身を投じたのだった。

１０分程歩いて着いた先は、人気のない神社。
そこには神社の賽銭箱の前で箒を持って掃除をしている大きなリボンが特徴的な赤

白色の服を着た少女がいた。
少女は俺と坂上に気づくと近づいてくる。
「あらおかえり、散歩終わったかしら？」
「あぁ終わったよ、ちょっと拾い物をしたけどね」
「はぁ…拾い物ってその外来人ってこと？あんたもお人好しね」
「まあな。じゃあ取り敢えず上井の分の飯も頼む」
「ええ～……めんどくさい」
どうしよう…話を聞く限り飯を食べさせてもらえなさそうだ。
というか今俺の事を外来人って言ってたな…何でだろう？
……あぁ駄目だ、腹が減りすぎて考えることも辛くなってきた。
如何にも空腹そうな俺を少女は見つめる。
そして俺の状況が割とガチな事を感じて気だるそうにため息をつく。
「はぁ…取り敢えずおにぎりを作ってくるわ」
「ありがとう、やっぱり霊夢は優しいな」
「目の前で死なれても困るから、仕方なくよ」
「そうだな」
「じゃあ行ってくるわね、暫くそこでのんびりしといて」

「分かった」
坂上と少女の会話が終わり、少女が神社のに行った。
おにぎりを貰える事になったのでかなり喜びつつ、賽銭箱の前まで歩く。
そして時間潰しにお参りでもしておこうと思って、ある事に気づいた。
「やべぇ……」
「どうした？死にそうなのか？」
「いやそれもそうだけど、財布が無い……」
ズボンのポケットにがま口の財布を入れていたはずだがどうやら無くしてしまったらしい。
でも何処で落としたかの検討はついている、恐らく紅魔館だ。
あそこでレミリアに襲われて、逃げ回ったり吹っ飛ばされたりした時に落としたのだろう。
……多分きっとｍａｙｂｅ
しかし幸いな事にズボンのポケットに１００円玉が入っていた。
「参拝に１００円使うのはもったいない気もするけど……ま、いっか」
ブツブツと口に出しつつ、１００円を賽銭箱の中に投げる。
１００円は賽銭箱に入りチャリンではなくコッという音を立てた。

その音はまるで、賽銭箱の中には何も入っていないかのよ…本当に入ってなかった。
どんだけお金ないんだよ…こんな神社もあるんだな。
そう思いつつも賽銭箱の前についている綱を引いて金を鳴らす。
そして取り敢えず平和な日常が戻ってきますようにと無言で祈っておいた。
「何を願ったんだ?」
祈り終わった後で坂上が聞いてくる。
正直言って自分の願い事を他人に教えるのはあまりやりたくないが、大した事は願ってないので普通に答える。
「まぁ普通に平和な日常が来ますようにとかだな」
「そうか…」
納得したように頷く坂上は少し間を置いた後また言葉を紡ぐ。
「でも幻想郷(こ)じゃその願いは多分叶わないと思うぞ」
「え…治安とかでも悪いのか?」
治安が悪いと聞いて頭に浮かぶのは銃撃戦とかリンチとかカツアゲとかカツアゲとかカツアゲとか……
後半カツアゲしか思い浮かばなかった……
「いや別に犯罪が多いってわけじゃないけど…結構騒ぎが多くてな」

「へー、今の時期に何か祭りでもしてるのか」
日本には火花を人にぶつけたり撒き散らしたりして大騒ぎする祭りがあるらしいがそんな感じなのか？
いやでもこんな所で火を使えばたちまち大火事だろ。
「いや今の時期というよりは一年中なんだけどな」
「え？」
「まぁ実際聞いても信じられないよな。……あ、ちょうどいい所に」
坂上はふと上を見上げる。
坂上に釣られて俺も上を見上げる。するとそこには何かふよふよと浮いている物体があった。
なんともいえない奇妙な現象だ。もしかして舞空術とかなのか……？
空に浮いている物体に驚いている俺に対して、坂上は浮いている物体に声をかけた。
「魔理紗ー！普通に階段上ってこいよー!!」
どうやらあの物体は魔理沙というらしい。なんか人の名前みたいだ。
そんな事を思っていたらなんと魔理沙と呼ばれる物体が返事を返した。
「こっちの方が楽なんだぜ！今そっちに行くからなー！」
本日二度目の驚き。どうやら俺の知らない間に人は舞空術を会得したようです。

驚愕している俺を見て坂上は補足説明を始める。
「あぁ、悪い悪い。上井は外来人だから信じられないよな。一応言っておくが、ここの人間は飛べるやつが結構いるんだよ」
「え、もしかしてここの住民全員サ○ヤ人的なあれ？」
「どこをどうしたらそうなるんだよ」
「ですよね……」
脳の許容量が限界を超えたので、理解するのを放棄する俺。
そこから我に返るまで数分かかってしまった。